イビソク京都市内遺跡調査報告　第19輯

平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡

―柿本町における埋蔵文化財発掘調査報告書―

株式会社　イ　ビ　ソ　ク

平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡　―柿本町における埋蔵文化財発掘調査報告書―

株式会社　イ　ビ　ソ　ク

イビソク京都市内遺跡調査報告　第19輯

平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡

－柿本町における埋蔵文化財発掘調査報告書－

株式会社 イ ビ ソ ク

例　言

1．本書は京都府京都市中京区両替町姉小路下る柿本町406番、408番に所在する平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、文化財保護法第93条第１項に基づき平成29年６月12日付で届け出された土木工事に伴い、平成29年６月26日に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施した結果、平安京跡に伴う遺構が検出されたため、同課によりその実施が指示されたものである。[京都市番号17H045]

3．本調査は、東急ステイ株式会社による東急ステイ京都柿本町別館新築工事に伴う発掘調査であり、調査に要する費用は同社が負担した。

4．発掘調査は平成29年９月６日から平成29年10月６日の期間、宿泊施設建設予定地のうち、121.5㎡を対象に行った。

5．発掘調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言のもと、株式会社イビソク（代表取締役　森　重幸）が実施した。

6．発掘調査は次の体制で行った。

調 査 主 体　株式会社イビソク
調　査　員　田邉　一元
調　査　員　近藤　真人
調査補助員　小池　智美・伊藤　雅哉
調 査 協 力　東急ステイ株式会社
　　北和建設株式会社

7．報告書の執筆は第２章、第４章第１～４節を小池智美が、第４章第５節を石井明日香が行い、その他は田邉が行った。編集は田邉が行った。

8．本報告書では次に示した地図を調整・使用している。
京都市地形図（1：2,500）「三条大橋」「壬生」　京都市都市計画局発行

9．本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。

10．本報告書で示す本書の方位は真北を示し、座標は、国土座標第Ⅵ系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海水面（T.P.）に基づく数値である。

11．本報告書に掲載した写真は、遺構写真を田邉が、遺物写真を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。

12．調査・報告書作成にあたっては以下の方の協力を得た。（五十音順/敬称略）
伊藤淳史（京都大学文化財総合研究センター）、藤澤良祐（愛知学院大学文学部）、山田邦和（同志社女子大学現代社会学部）

13．出土遺物については、関連する図面・写真等の記録類と共に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管している。

凡　例

1．遺構・遺物写真の縮尺は任意である。

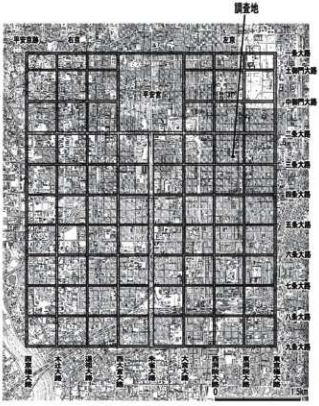
2．表で示した出土遺物の計測値は、残存値に［　］、復元値に（ ）を付けて表現する。

3．遺物番号は、遺物実測図・観察表・遺物写真図版でそれぞれ対応している。

4．本報告書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』2011年度版を使用した。

5．土器編年の型式、時期の呼称は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所『研究紀要』第３号「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」に従った。なお、時期区分に対応する年代は第１表の通りである。

第１表　平安京土器形式―年代対応表



第１図　平安京復元図と調査地の位置

目　次

例言・凡例
目次・挿図目次・表目次・図版目次
第１章　調査の経緯……1
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査の経過
　第３節　調査の方法
第２章　位置と環境……3
第３章　遺　構……6
　第１節　基本層序
　第２節　遺構の概要
　第３節　第１面の遺構
　第４節　第２面の遺構
　第５節　第３面の遺構
第４章　遺　物……19
　第１節　遺物の概要
　第２節　第１面の遺物
　第３節　第２面の遺物
　第４節　第３面の遺物
　第５節　瓦類
第５章　まとめ……30
出土遺物観察表・出土瓦類観察表
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　平安京復元図と調査地の位置
第２図　調査地位置図（縮尺1/2,500）…… 1
第３図　調査区配置図（縮尺1/400）…… 2
第４図　周辺調査位置図（縮尺1/2,500）…… 3
第５図　基本土層図（縮尺1/80）…… 6
第６図　第１面全体図（縮尺1/150）…… 9
第７図　第１面遺構図（縮尺1/20・1/40・1/60）……10
第８図　第２面全体図（縮尺1/150）……12
第９図　第２面遺構図１（縮尺1/20・1/40）……13
第10図　第２面遺構図２（縮尺1/20・1/40）……14
第11図　第２面遺構図３（縮尺1/20）……16
第12図　第３面全体図（縮尺1/150）……17
第13図　第３面遺構図（縮尺1/40）……18
第14図　第１面出土遺物実測図（縮尺1/3）……20
第15図　第２面出土遺物実測図１（縮尺1/3）……21
第16図　第２面出土遺物実測図２（縮尺1/3）……23
第17図　第２面出土遺物実測図３（縮尺1/3）……24
第18図　第３面出土遺物実測図（縮尺1/3）……25
第19図　出土瓦実測図１（縮尺1/4）……26
第20図　出土瓦実測図２（縮尺1/4）……27
第21図　出土瓦実測図３（縮尺1/4）……28
第22図　出土瓦実測図４（縮尺1/4）……29

表 目 次

第１表　平安京土器形式―年代対応表
第２表　周辺調査地一覧…… 4
第３表　遺構概要表…… 7
第４表　遺物概要表……19
第５表　出土遺物観察表……32
第６表　出土瓦類観察表……35

図版目次

図版一　1．調査前状況（北から）
2．井戸123掘削状況（西から）
3．井戸123断割状況（西から）
4．溝状遺構105検出状況（東から）
5．溝状遺構105土層断面状況（西から）

図版二　1．溝状遺構105完掘状況（東から）
2．土坑118完掘状況（北から）
3．柱穴121土層断面状況（南から）
4．柱穴121完掘状況（北から）
5．第１面完掘状況（南から）

図版三　1．第１面完掘状況（西から）
2．柱穴144、柱穴145検出状況（西から）

図版四　1．柱穴144土層断面状況（南から）
2．柱穴144完掘状況（北から）
3．柱穴145土層断面状況（南から）
4．柱穴145完掘状況（北から）
5．溝状遺構138・柱穴144・柱穴145完掘状況（西から）

図版五　1．土坑146完掘状況（南から）
2．土坑148完掘状況（南から）

図版六　1．土坑146土層断面状況（北から）
2．土坑146、土坑148土層断面状況（西から）
3．土坑210土層断面状況（北西から）
4．柱穴125掘削状況（南西から）
5．柱穴125完掘状況（南から）

図版七　1．柱穴127完掘状況（西から）
2．柱穴128遺構検出状況（西から）
3．柱穴128土層断面状況（東から）
4．柱穴128完掘状況（東から）
5．柱穴136掘削状況（南西から）
6．柱穴136完掘状況（北東から）
7．柱穴147土層断面状況（南から）
8．柱穴147完掘状況（北から）

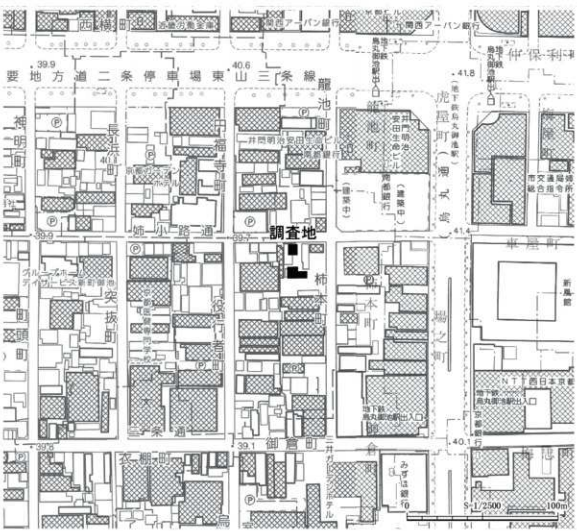
図版八　1．土坑134土層断面状況（北から）
2．土坑134遺物出土状況（北から）

図版九　１．土坑134完掘状況（北から）
２．溝135遺構検出状況（西から）
３．溝135土層断面状況（西から）
４．溝135掘削状況（西から）
５．溝135掘方埋土土層断面状況（西から）
図版十　１．溝135完掘状況（西から）
２．第２面、第３面完掘状況（西から）
図版十一　１．Ａ区南壁土層断面状況（北から）
２．Ｂ区東壁土層断面状況（西から）
図版十二　１．出土遺物１
図版十三　１．出土遺物２
図版十四　１．出土遺物３
図版十五　１．出土瓦類１
図版十六　１．出土瓦類２
図版十七　１．出土瓦類３

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

東急ステイ株式会社は、京都府京都市中京区両替町姉小路下る柿本町 406、408 番において宿泊施設建設を計画した。計画地は、平安京跡および烏丸御池遺跡の範囲内に含まれていることから、同社より京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）へ、平成 29 年６月 12 日付で文化財保護法第 93 条第１項に基づく届出が行われた。これを受けて、京都市文化財保護課は平成 29 年６月 26 日に試掘調査を実施した結果、遺構の広がりを確認したことから、発掘調査実施の指示がなされた。調査については、株式会社イビソクが東急ステイ株式会社より委託を受けて実施することとなった。そこで、京都府教育委員会に文化財保護法第 92 条第１項に基づき埋蔵文化財発掘調査の届出を平成 29 年９月４日付で提出した。届出の受理をうけて、京都市文化財保護課の指導、監督のもとに、株式会社イビソクが発掘調査・整理作業・報告書作成を行うこととなった。



第２図　調査地位置図（縮尺 1/2,500）

第２節　調査の経過

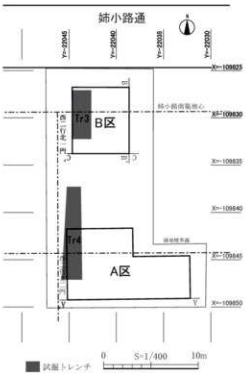
発掘調査は、平成 29 年９月６日から平成 29 年 10 月６日まで実施した。調査面積は 121.5 ㎡である。調査箇所は２か所に分かれるため、調査を行うにあたって、南側調査地（79.5 ㎡）をＡ区、北側調査地（42 ㎡）をＢ区と呼称して調査を行った（第３図）。京都市文化財保護課の試掘調査結果によって、Ａ区では地表から 1.0 m程度まで、Ｂ区では地表から 1.5 m程度まで解体撹乱層及び近現代の盛土層であることが判明していたため、この層を表土層としてバックホウによって除去を行った。Ａ区では、試掘時には確認できなかった整地層を確認したため、この面を第１面として遺構の検出や遺構の掘り下げなどを順次行い、遺構の実測、写真撮影を行いながら調査を進めた。その後、Ａ区については整地層の掘り下げを行い、第２面の調査を行った。Ｂ区は１面調査のみである。遺構面毎の遺構検出時と完掘時には、京都市文化財保護課の検査を受けた。

第３節　調査の方法

表土掘削は、バックホウによって行い、その際に可能なものについては撹乱除去も同時に行った。表土掘削後には遺構検出を行い、確認した遺構には番号を付して調査記録の管理を行った。遺構番号は第１面を「101」から、第２面を「201」から順に番号を付して遺構面毎に連番とした。遺構の記録作業は、平面測量については、トータルステーションによる３次元測量とオルソ画像による写真測量を併用して行い、遺構断面測量については手実測とオルソ画像による写真測量を併用して行った。各遺構面完掘後に全景写真を撮影した。

遺構、遺物図面はデジタルトレースによる。出土遺物を踏まえて各遺構の属性の再検討を行い、遺構の機能を推察した。その結果、一部の遺構について、その時期を変更し、第３面に割り振った。

出土遺物は洗浄・注記・接合の後に実測対象検討遺物（Ｂランク）と非掲載遺物（Ｃランク）にランク分けを行い、実測対象検討遺物から報告書掲載遺物（Ａランク）を抽出した。報告書掲載遺物は、掲載順にコンテナに収納し、非掲載遺物は遺構番号順にコンテナに収納した。



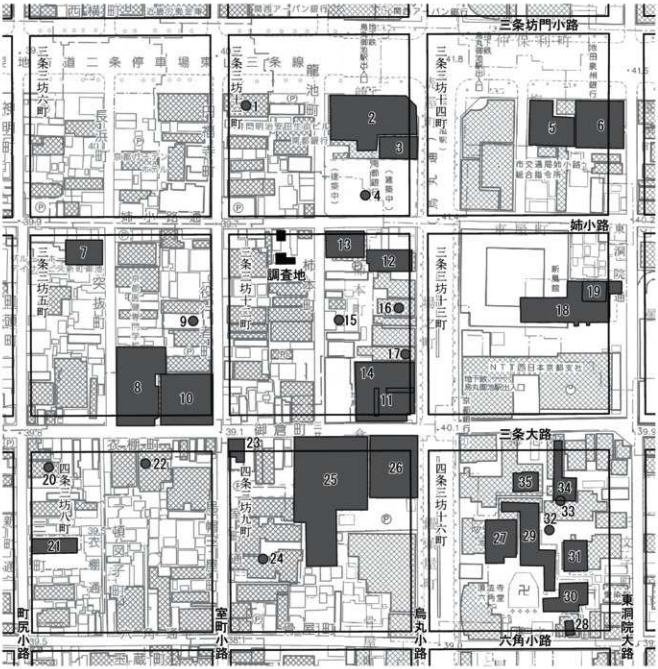
第３図　調査区配置図（縮尺 1/400）

第２章　位置と環境

調査地は北を姉小路通、南を三条通、東を両替町通、西を室町通に囲まれた区画の北端に位置し、姉小路通に面している。

当地は弥生時代～古墳時代の集落跡である烏丸御池遺跡の北西寄りに位置する。

平安京の条坊では左京三条三坊十二町に当たる。この地は平安後期、白河法皇・鳥羽上皇・待賢門院璋子らの御所となった三条西殿の所在地である。また、この町の東には白河法皇・鳥羽上皇の御所であった三条東殿、南には鳥羽上皇の御所となった三条南殿が所在しており、一帯が白



第４図　周辺調査位置図（縮尺 1/2,500）

河・鳥羽と並び院政期の政治の中心地であった。白河法皇は三条西殿で崩御し、その後は待賢門院の女院御所となるが、焼失・再建を経て再び焼失する。12 世紀後半には後白河法皇が新たにこの地を院御所とした。

鎌倉時代のこの地については明らかでないが、室町時代以降当地周辺は商業地区となり、14 世紀末には綿商人（『祇園社記』）、また 15 世紀前半には酒屋（『北野天満宮文書』）、近隣に材木屋（『祇園社記』）の存在が知られる。また『洛中洛外図屏風』歴博甲本や上杉本には、この町の西面に当たる室町通三条以北に商店が描かれており、商家が建ち並ぶ地域であったことが窺える。

三条三坊十二町では既往の調査で平安時代から江戸時代の各時代の三条大路北側溝、鎌倉時代後期の烏丸小路西側溝が検出されている。三条西殿に関連すると思われる遺構は少ないが、同時代の瓦が多く出土している（第４図 14）。

今回の調査でも三条西殿関連遺構、また調査区内を姉小路南築地心の推定ラインが通ることから条坊関連遺構の検出が期待された。

第２表　周辺調査地一覧

番号	遺跡名	調査	調査年度	概要	文献
1	三条三坊十一町	試掘	1986	GL-1.2m 以下室町後期・江戸の包含層各 1、-2.04m にて室町中期の溝。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 61 年度　京都市文化観光局
2	三条三坊十一町	発掘	1983	烏丸小路西側溝、平安時代の門跡、室町時代の集積墓・土壙墓。	『平安京左京三条三坊十一町（第２次調査）』平安京跡研究調査報告　第 14 輯　財團法人古代學協會　1984 年
3	三条三坊十一町	発掘	1989	烏丸小路西側溝、平安時代の井戸、鎌倉時代の溝、室町時代の井戸。	『平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告　第 12 輯　財團法人古代學協會　1984 年
4	三条三坊十一町跡	試掘	2005	GL-1.45m 以下で中世の礎石建物跡・土坑。先史時代の洪積等検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告』平成 17 年度　京都市文化市民局
5	三条三坊十四町	発掘	1992 ～ 1993	平安時代中期の溝、鎌倉時代の溝・土坑・柱穴・塀、室町時代の井戸・土坑・塀。	『平安京左京三条三坊』『平成 4 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995 年
6	三条三坊十四町	発掘	1982	東洞院大路路面・西側溝、鎌倉時代～室町時代の溝・井戸、室町時代後期の塀。	『左京三条三坊』『昭和 57 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1984 年
7	三条三坊五町	発掘	1980	平安時代前期の掘立柱建物・溝、平安時代後期～鎌倉時代の土坑、室町時代の石組井戸・土坑・集石遺構、江戸時代の井戸・土坑・鋳造関連遺構等検出。平安時代後期～鎌倉時代のガラス製品・石製品等が出土。	『平安京左京三条三坊五町』『昭和 55 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
8	三条三坊五町	発掘	2010	縄文時代～平安時代中期の土坑・溝、平安時代後期～鎌倉時代の井戸・土坑・柱穴、鎌倉時代～室町時代の土坑、桃山～江戸時代の井戸・土取穴。	『平安京左京三条三坊五町・烏丸御池遺跡』古代文化調査会　2011 年
9	三条三坊五町	試掘	1982	GL-1.0m にて室町時代後期の土坑 1 基検出。下層にて平安時代中期の包含層検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 57 年度　京都市文化観光局
10	三条三坊五町	発掘	1979	平安時代後期の柱穴、鎌倉時代～室町時代の土坑・溝・室町小路西側溝、中世末～近世の井戸・墓などを検出。	『平安京左京三条三坊五町』『昭和 54 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
11	三条三坊十二町	発掘	1969	三条大路北側溝・烏丸小路西側溝、平安時代後期の井戸・土坑、鎌倉時代～室町時代の井戸・溝・土坑など。	『平安京三条西殿跡発掘調査報告』『平安博物館研究紀要』第 3 輯　平安文化の研究 2　1971 年　財團法人古代學協會　（１次）
12	三条三坊十二町	発掘	1973	平安時代末～鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の井戸・土坑・柱穴など。	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告　第 7 輯　財團法人古代學協會　1983 年　（２次）
13	三条三坊十二町	発掘	1973	鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の井戸・土坑・柱穴など。	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告　第 7 輯　財團法人古代學協會　1983 年　（３次）

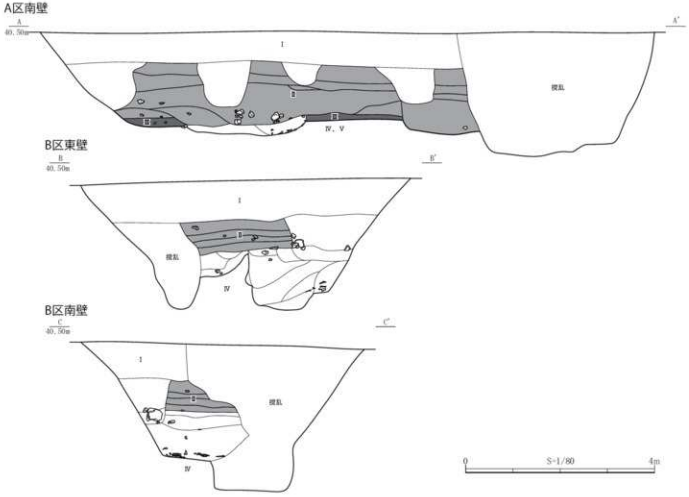
番号	遺跡名	調査	調査年度	概要	文献
14	三条三坊十二町	発掘	1973	三条大路北側溝・烏丸小路西側溝、平安時代後期の井戸・土坑、鎌倉時代～安土桃山時代の井戸・柱穴・建物・石組遺構。	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告　第7輯　財團法人古代學協會　1983年　（4次）
15	三条三坊十二町	試掘	2016	GL-0.5～2.5mの間で江戸時代、室町時代の多数の土坑や石室、石組井戸などを確認。GL-2.5mで平安時代の整地土を確認。	『平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡』『京都市内遺跡試掘調査報告』平成28年度　京都市文化市民局
16	三条三坊十二町	試掘	1983	GL-0.6m以下平安後期の整地層、室町～江戸の井戸3、土坑3検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度　京都市文化観光局
17	三条三坊十二町	試掘	2001	平安時代の土坑、室町時代の土坑・地下式土坑などを検出。	『平安京左京三条三坊十二町跡』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成13年度　京都市文化市民局
18	三条三坊十三町	発掘	1991～1992	東洞院大路路面・西側溝、平安時代の井戸、室町時代の井戸・池・土坑・柱穴・堀。	『平安京左京三条三坊』『平成3年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年
19	三条三坊十三町	発掘	2016	1991年度調査時に保存された庭園遺構の記録保存調査。新旧2時期が存在することが明らかになった。	『平安京左京三条三坊十三町跡・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-10　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2017年
20	四条三坊八町	試掘・立会	1981	GL-0.65mにて鎌倉前期～江戸の包含層、土坑4（鎌倉前期1、江戸1、近代1）を検出。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報』昭和56年度　京都市文化観光局
21	四条三坊八町	発掘	2013	弥生時代の土坑・溝、平安時代前期の土坑、平安時代後期～鎌倉時代前半の土坑・溝、鎌倉時代後半～室町時代の地下室・土坑・溝・井戸、戦国時代～近世初頭の土坑。	『平安京左京四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-2　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2013年
22	四条三坊八町	試掘	1994	GL-0.9mで室町時代の遺物包含層、GL-1.0mで平安時代の土坑2基・室町時代の土坑2基。	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成6年度　京都市文化観光局
23	四条三坊九町	発掘	1988	室町時代後期の井戸・土坑、江戸時代以降の堆積層などを検出。	『平安京左京四条三坊』『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
24	四条三坊九町	試掘	2009	GL-1.4mで中世整地層、-1.8mで基盤層を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告』平成22年度　京都市文化市民局
25	四条三坊九町	発掘	1987	平安時代中期～後期の建物・池など。	「平安京左京四条三坊」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1991年
26	四条三坊九町	発掘	1996	平安時代後期～末の鍵水・建物・井戸・土坑、鎌倉時代～室町時代の池・溝・石敷遺構・井戸・柱穴などを検出。	『平安京左京四条三坊九町一第一勧業銀行京都支店改築に伴う調査一』古代文化調査会
27	四条三坊十六町	発掘	1974～1975	平安時代中期の溝、平安時代後期～鎌倉時代の溝、室町時代の溝・土坑、江戸時代の六角堂関連以降など。	『平安京六角堂の発掘調査』平安京跡研究調査報告　第2輯　財團法人古代學協會　1977年
28	四条三坊十六町	発掘	1977	平安時代末～鎌倉時代の土坑、室町時代の土坑。	『平安京六角堂跡第2次発掘調査概報』財團法人古代學協會　1980年
29	四条三坊十六町	発掘	1994	平安時代後期の溝・井戸・土坑、鎌倉時代～室町時代の溝・井戸、江戸時代の土坑・井戸・堀、太子堂関連以降など。	『六角堂第3次・第4次調査』平安京跡研究調査報告　第21輯　財團法人古代學協會　2006年（3次）
30	四条三坊十六町	発掘	1996	平安時代後期の溝・井戸・土坑、鎌倉時代～室町時代の溝・井戸、江戸時代の土坑・井戸・堀、太子堂関連以降など。	『六角堂第3次・第4次調査』平安京跡研究調査報告　第21輯　財團法人古代學協會　2006年（4次）
31	四条三坊十六町	発掘	1986	平安時代後期の柱穴・井戸、鎌倉時代～室町時代の柱穴、室町時代後期の建物跡・土坑・土取り穴など。	『平安京左京四条三坊』『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1989年
32	四条三坊十六町	試掘	1997	GL-2.1mで中世の柱穴4基検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成9年度　京都市文化市民局
33	四条三坊十六町	試掘	1987	GL-1.3mにて室町末期～江戸前期の木製品を多量に含む池状堆積を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度　京都市文化観光局
34	四条三坊十六町	発掘	不明	三条大路南側溝を確認。	『六角堂第3次・第4次調査』平安京跡研究調査報告　第21輯　財團法人古代學協會　2006年
35	四条三坊十六町	発掘	不明	西二行と西三行の境界に当たるところで小道を検出。	『六角堂第3次・第4次調査』平安京跡研究調査報告　第21輯　財團法人古代學協會　2006年

第３章　遺　構

第１節　基本層序（第５図、図版十一）

本調査区の基本層序は、地表面から数えて５層に大別できる。

第Ⅰ層は、現代の盛土層である。層中にコンクリート片やレンガブロックなどを含んでいる。層厚はＡ区で０.６ｍ程度、Ｂ区で０.８ｍ程度であり、北側が厚くなっている。第Ⅱ層は、近代以降の盛土層である。層厚はＡ区で０.９ｍ程度、Ｂ区で０.６ｍ程度であり、複数層が概ね水平に堆積している。第Ⅲ層は灰褐色礫混土である。この層はＡ区東半部のみで確認でき、それ以外は撹乱や遺構の重複が著しく確認できなかった。層厚は０.15ｍ程度で、よく締まっている。層中に小礫を含み、Ａ区南東部は特にその包含率が非常に高い。この面を第１面とし、室町時代後期～江戸時代前期の遺構を検出した。第Ⅳ層は、浅黄色シルト質土、第Ⅴ層は暗灰黄色混礫泥砂土で、両層とも地山である。Ａ区では、浅黄色シルト質土が調査区中央付近から南西角部に向かって斜行するように確認でき、その両側に暗灰黄色混礫泥砂土が広がっている。Ｂ区では、第Ⅳ層の浅黄色シルト質土のみが確認できた。この面を第２面とし、平安時代後期～室町時代前期の遺構を検出した。



第５図　基本土層図（縮尺 1/80）

第２節　遺構の概要

調査で確認した遺構は、総遺構数62基で、その内訳は第１面23基、第２面36基、第３面３基である。時期は第１面が室町時代後期～江戸時代前期に属し、Ａ区でのみ確認できた。第２面は鎌倉時代～室町時代前期に属する。第３面は平安時代後期に属し、Ｂ区でのみ確認できた。

第１面では、井戸・溝状遺構・土坑・柱穴・小穴を確認した。遺構、遺物ともに少なく、検出面直上まで撹乱が及んでいることから遺構上部が削平されていると考えられ、各遺構の深度も浅いものが多い。調査区中央部では、東西方向に延びる溝状遺構を確認した。柱穴は確認しているが、建物配置の確認には至らなかった。

第２面では、溝状遺構・土坑・柱穴・小穴を確認した。Ａ区では、調査区西半部に遺構が集中し、Ｂ区では、全域にわたって遺構の重複度合いが高い。柱穴は、東西方向に列をなすものを確認できたほか、遺構内に礎石をもつものも確認できた。土坑は、確認長で長軸が２ｍ前後になるものもあり、こうした大型の土坑は廃棄土坑と考えられる。溝は、東西方向に延び、姉小路南築地芯の推定軸線と位置や方向が概ね符合する。

第３面では、溝状遺構、土坑を確認した。Ｂ区でのみ確認できた遺構で、第２面からの撹乱が著しく、確認できた遺構は３基のみである。

第３表　遺構概要表

時　代	主要遺構	備考
室町時代後期 ～ 江戸時代前期 （第１面）	柱穴 121 土坑 118 溝状遺構 105 井戸 123	
鎌倉時代 ～ 室町時代前期 （第２面）	柱穴 125、127、128、136、144、145、202 土坑 146、148、215、216 溝状遺構 138	
平安時代後期 （第３面）	土坑 134 溝状遺構 135	

第3節　第1面の遺構（第6図、図版二・三）

第1面は、A区でのみ確認できた遺構面で、井戸・溝状遺構・土坑・柱穴・小穴を確認した。検出面の標高は38.6 m前後で、地形の傾斜は調査面積の制約から確認できなかった。遺物の出土量が極少量であったため、個々の遺構の時期比定は難しいが、室町時代後期～江戸時代前期頃の遺構と考えられる。

井戸 123（第7図、図版一）

井戸123は、A区の南西部に位置する石組井戸である。平面形は円形で、規模は掘方径が1.3 m、井戸内径は0.8 m、深さは3.0 m以上である。掘方幅は非常に薄く、0.1 m以内に収まり、掘方と石積みの隙間を暗灰黄色混礫泥砂で充填されていた。この掘方埋土は、基本層序第Ⅴ層に由来し、井戸掘削時の排土を転用したものと考えられる。石積みは、0.2～0.3 m程度の自然石及び割石を主体として積み上げられている。1.5 mまでは人力による掘削を行い、調査後にバックホウによる断ち割り調査を行ったが、3.0 m付近まで掘削した段階で石積みが崩落する可能性があったため、遺構の床面および遺構深度を確認することができなかった。出土した遺物から17世紀後半～18世紀前半（京都Ⅻ期）にかけて埋没した遺構と考えられる。

溝状遺構 105（第7図、図版一・二）

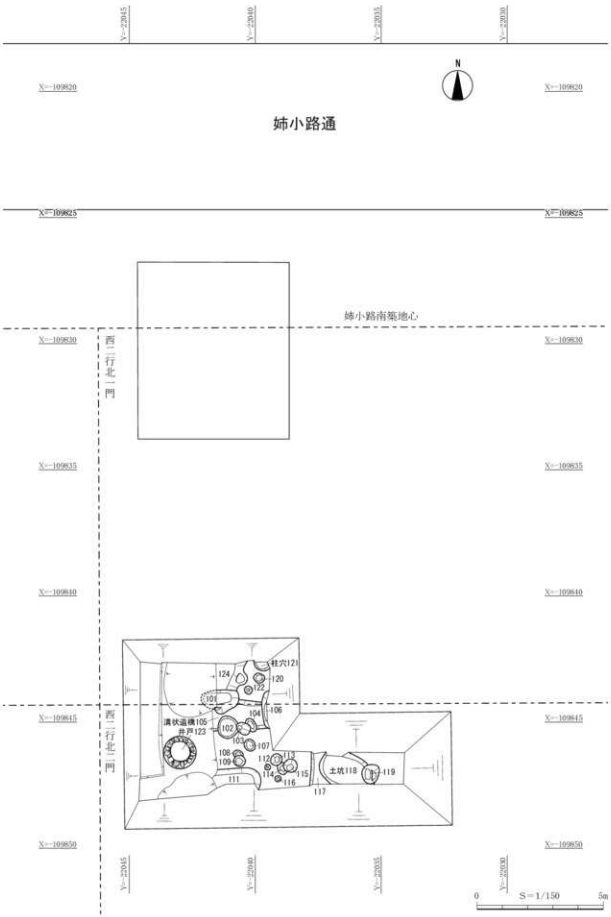
溝状遺構105は、A区の中央部に位置し、東西方向に走向する遺構である。平面形は直線的であるが、遺構の東側は調査区外へと延び、西側は撹乱によって壊されているため、全容は不明である。規模は、検出総長2.2 m、幅1.2 mで、深さは0.1 mを測る。遺構埋土は、同一遺構面のその他のものとは異なり、基本層序第Ⅴ層の浅黄色シルト土を主体とし、埋土中に小礫をほとんど含まないことが特徴として挙げられ、溝内に充填したかのような様相を示している。また、遺構の北側掘方は、西二行の北一門と北二門の境界推定軸線とほぼ重なっている。出土した遺物は小片かつ少数であり、遺構の時期は不明である。

土坑 118（第7図、図版二）

土坑118は、A区の東側突出部に位置する土坑である。遺構の北部南部共に調査区外へと続くため、遺構の全容は確認できないが、楕円形を呈すると考えられる。残存規模は、長径2.3 m、短径1.45 mで、深さは0.26 mである。出土した遺物は時期幅を大きく持つものの、近世に属する遺構と考えられる。

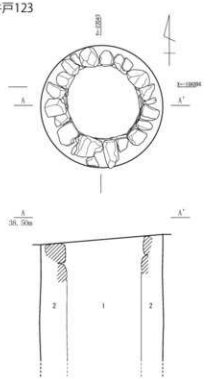
柱穴 121（第7図、図版二）

柱穴121は、A区の北東角部に位置する柱穴である。遺構の北半部は調査区外へと続くため、遺構の全容は確認できないが、円形を呈すると考えられる。残存規模は、長径0.55 m、短径0.35 mで、深さは最深部で0.25 mである。調査区壁面で確認できた柱痕の幅は0.23 mであるが、平面的に柱痕を確認できず、柱痕端部のみが確認できたものと考えられることから、本来の柱痕はより幅広であったと考えられる。出土した遺物から、17世紀～18世紀前半（京都Ⅺ期～Ⅻ期）までに収まる遺構と考えられる。



第６図　第１面全体図（縮尺 1/150）

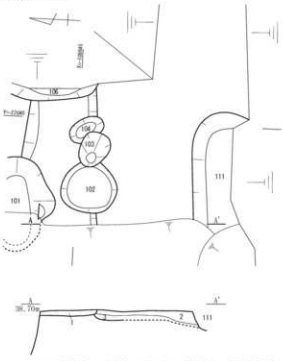
井戸123



1　2.5Y5/2 暗灰黄褐色混礫シルト質土　しまりややあり　粘性あり
2　2.5Y5/2 暗灰黄色混礫砂土　しまりややあり　粘性ややあり

0　S=1/40　1m

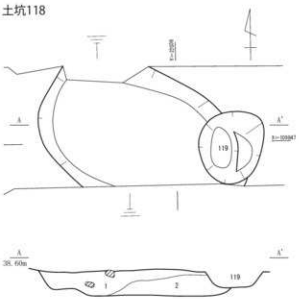
溝状遺構105



1　2.5Y6/6 明黄褐色シルト質土　しまりあり　粘性あり　2層の小礫を含む
2　基本土層III層（地山）
3　基本土層IV層（地山）

0　S=1/60　2m

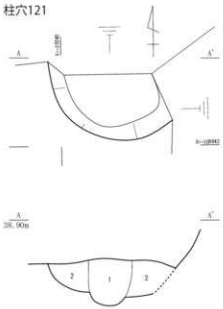
土坑118



1　2.5Y5/2 暗灰黄色土　しまりややあり　粘性ややあり
2　2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質土　しまりあり　粘性あり

0　S=1/40　1m

柱穴121



1　2.5Y5/1 黄灰色土　しまりややあり　粘性あり
2　2.5Y7/4 浅黄色土　しまりややあり　粘性ややあり
径1～5cmの小礫を含む

0　S=1/20　1m

第7図　第1面遺構図（縮尺 1/20・1/40・1/60）

第４節　第２面の遺構（第８図、図版十）

第２面は、第１面から 0.25 ～ 0.30 ｍほど下がったあたりの基本層序第Ⅳ層、第Ⅴ層の地山面で確認できた遺構面である。近代以降の攪乱が著しく、第２面まで及んでいたこともあり、中世以前の遺構については地山上での確認となった。同一面で確認された遺構のうち、遺構の重複関係や出土遺物などから確実に古代まで遡ると考えられる遺構については、第３面の遺構として次節で報告し、それ以外を本節で報告する。

溝状遺構 138（第９図、図版三・四）

溝状遺構 138 は、Ｂ区の中央部に位置し、東西方向に走向する遺構である。平面形は直線的であるが、遺構の東側は調査区外へと延び、西側を攪乱に、南側を遺構によって壊されているため、全容は不明である。規模は、検出総長 2.1 ｍ、幅 0.65 ｍで、深さは 0.1 ｍを測る。

また、遺構の床面より柱穴 144 と柱穴 145 という２基の柱穴を確認した。その柱間は、0.9 ｍである。各柱穴の平面形は、楕円形である。柱穴 144 の規模は、長径 0.56 ｍ、短径 0.44 ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。柱穴 145 の規模は、長径 0.52 ｍ、短径 0.3 ｍ、深さ 0.08 ｍを測る。柱穴 144、145 ともに遺構中央部が深く掘り込まれており、この部分に柱が建てられていたと考えられるが、遺構深度が非常に浅いこともあり、柱痕は確認できなかった。布掘り地業による柱穴列と考えられる。柱穴 144 より出土した遺物から 14 世紀前半～半ば（京都Ⅶ期新～Ⅷ期古）と考えられる。

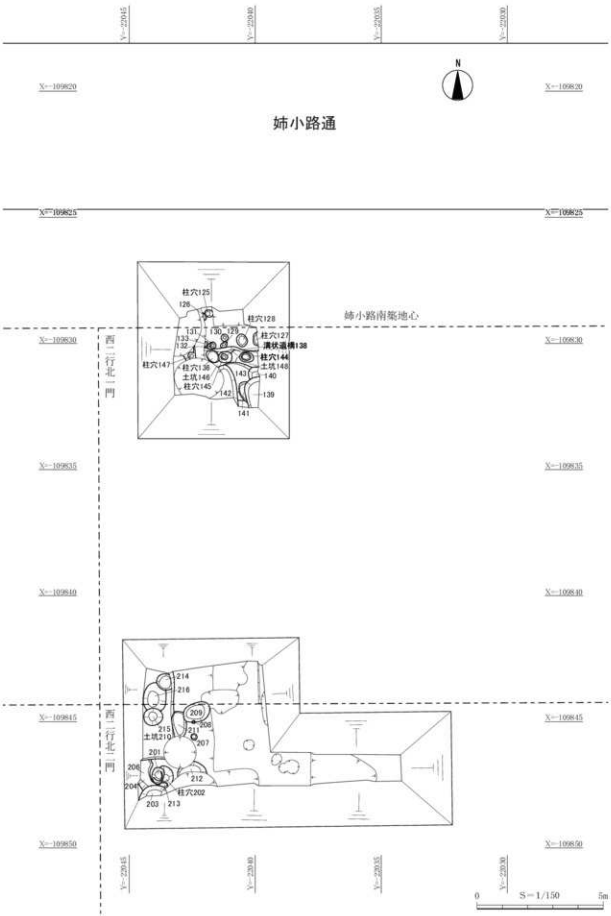
土坑 146（第９図、図版五・六）

土坑 146 は、Ｂ区の南部に位置する大型の土坑である。調査区外へと続くこと、攪乱や遺構の重複関係から平面形は不明である。遺構の規模も同様に不明であるが、確認長で２ｍ以上に及ぶ。深さは 0.7 ｍである。埋土は単層で、小礫や土師器片を多く含む。最下層からは、古代の京都系や播磨系瓦が折り重なる状態で多く出土しており、その瓦のほぼ全てが軒平瓦であった。この遺構は廃棄土坑と考えられる。出土した遺物は、11 世紀後半～ 12 世紀代のものに限られるが、遺構埋土の様相や遺構の性格などから 12 世紀～ 13 世紀（京都Ⅵ期～Ⅶ中期）の遺構と考えられる。

土坑 148（第 10 図、図版五・六）

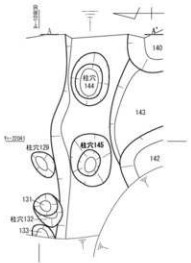
土坑 148 は、Ｂ区の南部に位置する大型の土坑である。掘削当初は、遺構埋土の相似度合いが高く、土坑 146 単体の遺構として掘削を行っていたが、土坑 146 を完掘した段階で土坑 148 の存在に気づき、そこから土坑 148 として掘削を行っている。

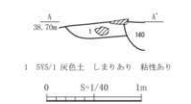
調査区外へと続くことや遺構の重複関係から平面形は不明である。遺構の規模も同様に不明であるが、確認長で２ｍ以上に及ぶ。深さは 1.25 ｍである。埋土中からは、大量の土師器片が出土している。埋土の堆積状況は４層に分層でき、南側から北側に向かって傾斜する斜堆積となっていることから、南側から人為的廃棄が行われたものと考えられる。出土した遺物は、11 世紀後半～ 12 世紀代のものに限られるが、遺構埋土の様相や遺構の性格などから 12 世紀～ 13 世紀（京都Ⅵ期～Ⅶ中期）の遺構と考えられる。



第８図　第２面全体図（縮尺 1/150）

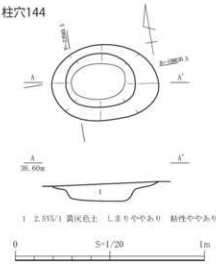
溝状遺構138





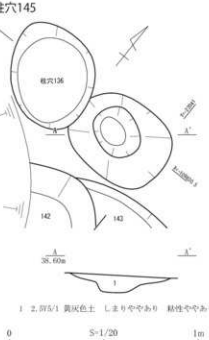
1　5Y5/1 灰色土　しまりあり　粘性あり

柱穴144



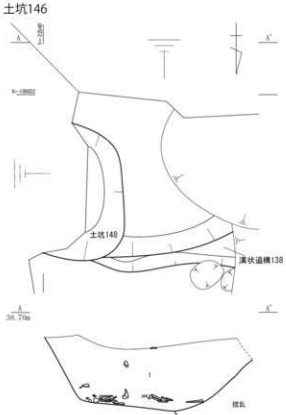
1　2.5Y5/1 黄灰色土　しまりややあり　粘性ややあり

柱穴145



1　2.5Y5/1 黄灰色土　しまりややあり　粘性ややあり

土坑146

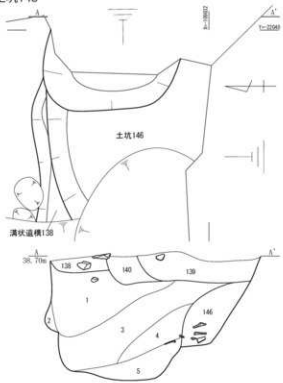


1　2.5Y5/2 暗灰黄色土　しまりややあり　粘性ややあり　小礫を多く含む
床面付近に瓦片を多く含む

0　S=1/40　1m

第９図　第２面遺構図１（縮尺 1/20・1/40）

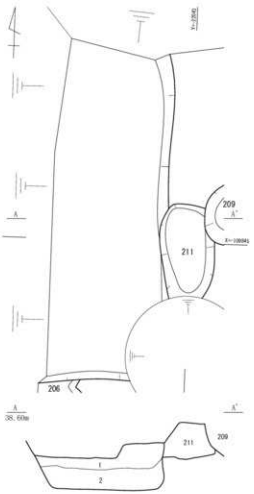
土坑148



1　2.5Y4/2 暗灰黄色土　しまりややあり　粘性ややあり　小礫を多く含む
2　2.5Y7/4 浅黄色土　しまりややあり　粘性あり
3　2.5Y5/3 黄褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　小礫を多く含む
4　2.5Y5/3 黄褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　小礫を少量含む
5　2.5Y7/4 にぶい黄色土　しまりややあり　粘性あり

0　S=1/40　1m

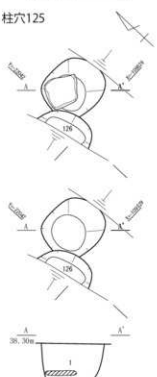
土坑210



1　2.5Y5/2 暗灰黄色泥縁土　しまりややあり　粘性ややあり
2　2.5Y4/2 暗灰黄色泥縁土　しまり弱い　粘性ややあり

0　S=1/40　1m

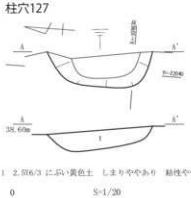
柱穴125



1　2.5Y6/2 灰黄色土　しまりあり　粘性あり

0　S=1/20　1m

柱穴127



1　2.5Y6/3 にぶい黄色土　しまりややあり　粘性ややあり

0　S=1/20　1m

第 10 図　第 2 面遺構図 2（縮尺 1/20・1/40）

土坑 210（第 10 図、図版六）

土坑 210 は、A 区の北西角部に位置する土坑である。遺構の北側及び西側は調査区外へと続いており、全容は不明であるが、平面形は方形を呈すると考えられる。規模は、確認できた限りで長径 3.5 m、短径 1.2 mである。深さは 0.5 mである。出土した遺物から 14 世紀前半の遺構と考えられる。

柱穴 125（第 10 図、図版六）

柱穴 125 は、B 区の北辺部に位置する柱穴である。遺構の東側を撹乱に、西側を遺構に壊されている。平面形は円形を呈し、規模は残存長で、長径 0.32 m、短径 0.29 mである。深さは 0.22 mである。遺構内には径 0.2 m程度の扁平な礎石が、北側寄りに据えられている。出土した遺物から 14 世紀～ 15 世紀初頭（京都Ⅶ期中～Ⅷ期中）の遺構と考えられる。

柱穴 127（第 10 図、図版七）

柱穴 127 は、B 区の北東部に位置する柱穴である。調査区外へと続いており、全容は不明であるが、平面形は円形あるいは楕円形を呈すると思われる。規模は残存長で、長径 0.56 m、短径 0.2 mである。深さは 0.1 mである。出土した遺物から 14 世紀～ 15 世紀初頭（京都Ⅶ期中～Ⅷ期中）の遺構と考えられる。

柱穴 128（第 11 図、図版七）

柱穴 128 は、B 区の北東部に位置する柱穴である。平面形は楕円形を呈する。規模は、長径 0.51 m、短径 0.43 mである。深さは 0.07 mである。遺構検出時にすでに礎石を確認でき、平坦面を上面にして据えられている。出土した遺物から 14 世紀～ 15 世紀初頭（京都Ⅶ期中～Ⅷ期中）の遺構と考えられる。

柱穴 136（第 11 図、図版七）

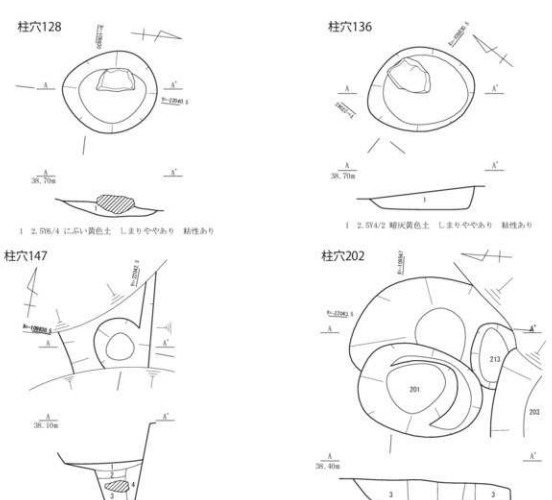
柱穴 136 は、B 区の中央部に位置する柱穴である。平面形は楕円形を呈する。規模は、長径 0.56 m、短径 0.45 mである。深さは 0.12 mである。遺構内に径 0.2 m程度の扁平な礎石が、北側寄りに据えられている。出土した遺物は 12 世紀後半～ 13 世紀前半のものであるが、遺構の重複関係から溝状遺構 138 よりも新しく、14 世紀半ば以降の遺構と考えられる。

柱穴 147（第 11 図、図版七）

柱穴 147 は、B 区の西部に位置する柱穴である。遺構の北側と南側を撹乱によって壊されており、全容は不明である。規模は残存長で、長径 0.58 m、短径 0.51 mである。深さは 0.4 mである。遺構内に径 0.2 m程度の扁平な礎石が据えられている。出土した遺物は小片 1 点のみであり、遺構の時期は不明である。

柱穴 202（第 11 図）

柱穴 202 は、A 区の南西部に位置する柱穴である。遺構の東側を撹乱に、西側を遺構に壊されている。平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は残存長で、長径 0.8 m、短径 0.4 mである。深さは 0.22 mである。遺構のほぼ中央で径 0.15 m程度の柱痕を確認できた。出土した遺物から 14 世紀～ 15 世紀初頭（京都Ⅶ期中～Ⅷ期中）の遺構と考えられる。



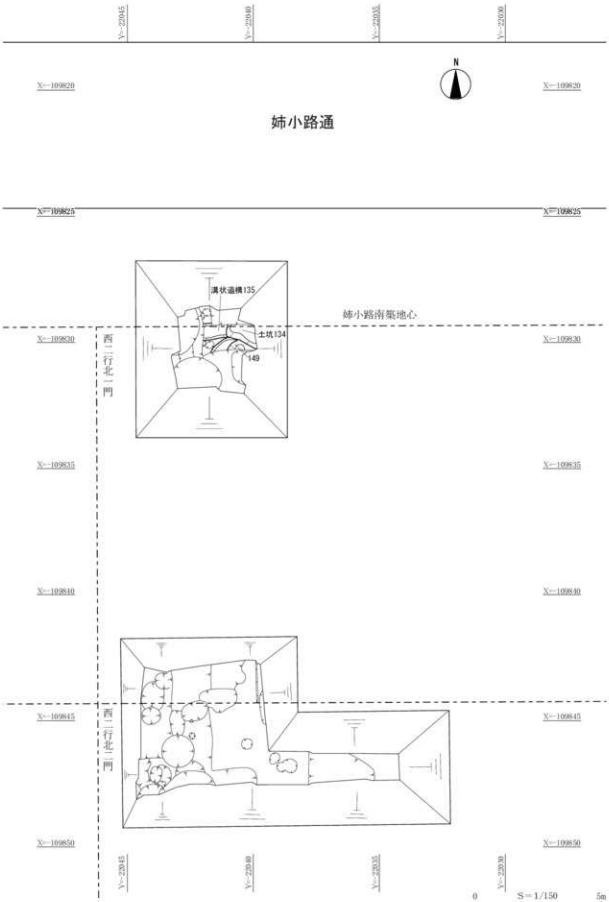
第11図　第2面遺構図3（縮尺 1/20）

第5節　第3面の遺構（第12図、図版十）

第3面は、地山上で確認した遺構のうち、平安時代後期に属すると思われる遺構を本遺構面として報告する。

溝状遺構 135（第13図、図版九・十）

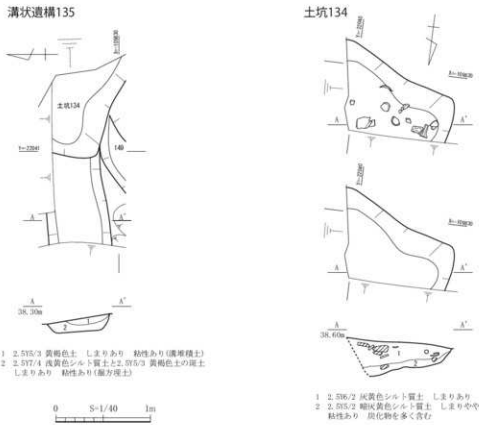
溝状遺構 135 は、B区の北部に位置し、東西方向に走向する遺構である。検出総長1mで、平面形は直線的であるが、遺構の東側は調査区外へと延び、西側は撹乱によって壊されているため全容は不明である。この遺構は掘方をもつ遺構で、掘方幅 0.66 m、深さ 0.18 mを測り、掘方の床面や壁面にはブロック土が充填されている。溝本体は、掘方中央ではなく南側に寄る形で構築されており、その幅は 0.3 m、深さ 0.11 mである。この遺構の北側掘方付近が、姉小路南築地芯に相当し、同方向に延びていることから、溝状遺構 135 は築地に関わる遺構と考えられる。出土した遺物から 10 世紀頃の遺構と考えられる。



第12図　第3面全体図（縮尺1/150）

土坑 134（第 13 図、図版八・九）

土坑 134 は、A 区の北東角部に位置する土坑である。遺構の北側は撹乱によって壊されており、東側は調査区外へと広がる。平面形は不定形であり、規模は残存長で、長径 1.3 m、短径 0.66 m、深さは 0.4 m である。埋土は、2 層に分層でき、1 層から遺物が多く出土しており、2 層には炭化物が多く含まれていた。出土した遺物から 11 世紀代（京都Ⅳ期古～新）の遺構と考えられる。



第 13 図　第 3 面遺構図（縮尺 1/40）

第４章　遺　物

第１節　遺物の概要

今回の調査で出土した遺物はコンテナ数で 10 箱である。なお、整理段階でランク分けを行った結果、11 箱となった。遺物の種類は土師器、須恵器、陶磁器、焼締陶器、瓦質土器、石製品など平安時代から江戸時代までの遺物が出土した。

以下、遺構別に概要を述べる。掲載遺物の詳細については、第５表の出土遺物観察表、第６表の出土瓦類観察表に記載した。

第４表　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
室町時代後期～江戸時代初期	土師器、土製品、焼締陶器、瓦、石製品		土師器２点、土製品１点、焼締陶器１点、瓦２点、石製品２点		
鎌倉時代～室町時代前期	土師器、瓦質土器、陶器、焼締陶器、青磁、白磁、瓦		土師器 21 点、瓦質土器７点、陶器１点、焼締陶器３点、青磁１点、白磁２点、瓦１点		
平安時代後期	土師器、須恵器、瓦器、白色土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、山茶碗、陶器、輸入陶器、青磁、白磁、瓦		土師器 12 点、須恵器６点、瓦器１点、白色土器１点、黒色土器１点、緑釉陶器１点、灰釉陶器２点、山茶碗１点、陶器１点、輸入陶器１点、青磁２点、白磁９点、瓦 26 点		
平安時代前期	黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器		黒色土器１点、緑釉陶器４点、灰釉陶器１点、		
合計		11 箱	114 点（４箱）	１箱	６箱

第２節　第１面の遺物

土坑 118（第 14 図、図版十二）

１は土製品のつぼつぼである。口縁外面に一条の沈線が巡る。２は白色系の土師器の皿である。底部をわずかに上方へ押し上げる。14 世紀代（京都Ⅶ期中～Ⅷ期古）の混入品と考えられる。３は土師器の皿である。12 世紀後半～ 13 世紀前半（京都Ⅵ期古～新）の混入品と考えられる。４古瀬戸の合子である。文様が線刻される。古瀬戸中期（13 世紀末～ 14 世紀前半）の混入品と考えられる。５は白磁の碗である。底部片で残存部の外面は露胎する。６は白磁の皿で、内面に一条の沈線が巡る。５・６は 11 世紀末～ 12 世紀代の混入品と考えられる。

土坑 118 からは近世の遺物が出土しているが、古代から中世の遺物も多く含まれている。

土坑 101（第 14 図、図版十二）

７は土師器の皿である。16 世紀後半（京都Ｘ期新～Ⅺ期古）のものである。

土坑 111（第 14 図、図版十二）

８は瓦質土器の羽釜である。口縁端部は外傾する面をもち、鍔部は断面三角形を呈する。９は青磁碗の底部である。高台内側まで施釉する。見込みに目跡がみられる。10 は石製の硯である。陸部のみが残存する。11 は砥石である。携帯用の仕上げ砥で、２面は使用のため非常に平滑である。別の２面には成形時の加工痕が残る。10・11 は鳴滝砥石と呼ばれているものである。

土坑 111 から出土した遺物は 14 ～ 15 世紀代のものと考えられる。

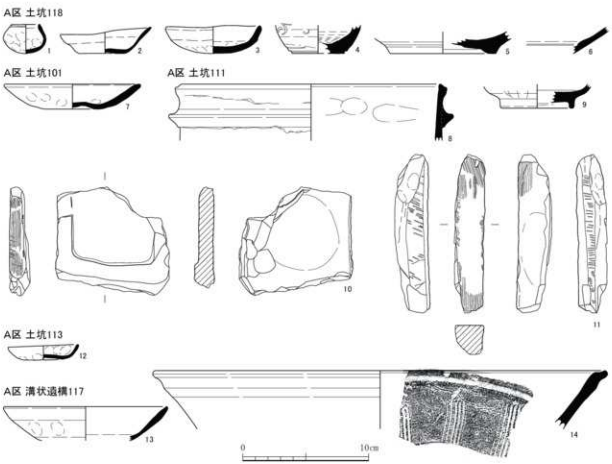
土坑 113（第 14 図、図版十二）

12 は土師器の皿である。底部中央を少し上に押し上げている。16 世紀半ば～ 17 世紀初頭（京都Ⅹ期中～Ⅺ期古）のものと考えられる。

溝状遺構 117（第 14 図、図版十二）

13 は土師器の白色系の皿である。14 世紀後半～ 15 世紀前半（京都Ⅷ期古～新）の混入品と考えられる。14 は焼締陶器の擂鉢である。内面に 5 条一単位の擂り目がみられる。内面全体と外面の一部に煤が付着する。

溝状遺構 117 から出土した遺物は 16 世紀前半のものと考えられる。



第 14 図　第 1 面出土遺物実測図　（縮尺 1/3）

第 3 節　第 2 面の遺物

柱穴 144（第 15 図、図版十二）

15・16 は土師器の皿である。15 は褐色系の皿で、16 は白色系の皿である。17 は白磁碗の口縁部である。

柱穴 144 から出土した遺物は 14 世紀前半～半ば（京都Ⅶ期新～Ⅷ期古）のものと考えられる。

土坑 146（第 15 図、図版十二）

18 ～ 23 土師器の皿である。18 はいわゆる「て」の字状口縁で、器壁はやや厚い。19 はいわゆるコースター型の皿で、口縁部から外面の底部外周までヨコナデが施される。20 ～ 23 は二段

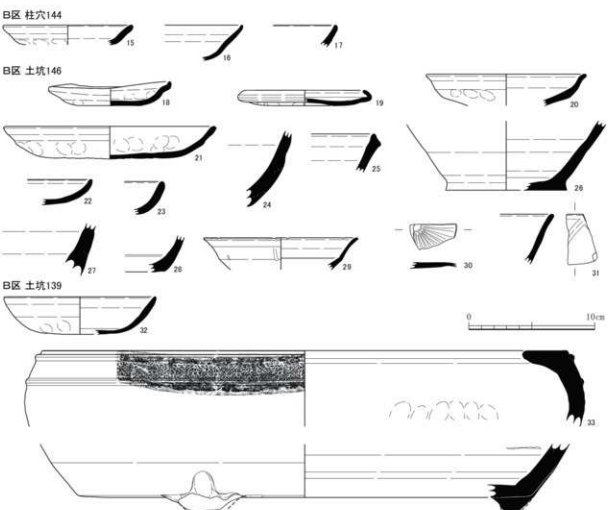
ナデの皿である。20 は二段の境が不明瞭で一段に近い様相であり、口縁端部は外反する。21 は口縁が外方に広がり、22・23 は口縁端部が立ち上がり気味になる。24 は土師器の鉢である。器壁は厚く、外面に輪積み痕が明瞭に残る。25・26 は須恵器の鉢である。25 は口縁端部が肥厚し、外傾する面をもつ。26 は底部外面に回転糸切り痕が残る。27 は陶器の壷と思われる体部片である。28 は輸入陶器の盤である。内面と外面体部に緑釉が施され、内面には一条の沈線がみられる。中国磁竈窯産とみられる。29 は白磁の皿である。口縁部中ほどで屈曲し、口縁端部は外反する。口縁端部を部分的にわずかに輪花状に成形し、その下部に縦に沈線を入れる。30 は白磁の蓋である。上面に花文が施される。31 は青磁の碗である。外面には蓮弁文が施される。

土坑 146 から出土した遺物は 11 世紀～ 12 世紀代（京都Ⅳ期古～Ⅴ期新）のものである。

土坑 139（第 15 図、図版十二・十三）

32 は土師器の皿である。13 世紀後半～ 14 世紀前半（京都Ⅵ期新～Ⅶ期中）の混入品と考えられる。33・34 は瓦質土器の奈良火鉢である。33 は口縁端部が内側へ伸び、幅のある平坦な面をなす。二条の突帯の間に花菱文を押捺する。34 は短い脚が付き、体部はわずかに内湾する。

土坑 139 から出土した遺物は 14 世紀後半～ 15 世紀と考えられる。



第 15 図　第 2 面出土遺物実測図 1（縮尺 1/3）

土坑 142（第 16 図、図版十三）

35 ～ 37 は土師器の皿である。35・36 はへそ皿である。37 は口縁が短く内湾して立ち上がる形状で、12 世紀後半～ 13 世紀前半（京都Ⅴ期新～Ⅵ期中）の混入品と考えられる。38・39 は土師器の鉢である。いずれも外面に輪積み痕が残る。38 は脚が付く。40 は土師質のミニチュア羽釜である。鍔は端部側が肥厚し、端部は面をなす。41 は瓦器の椀である。外面は密なミガキ、内面は粗い平行状のミガキを施す。12 世紀中頃の混入品と考えられる。42 は瓦質土器の鍋である。口縁部は断面がＬ字状で、端部は外傾する面をなす。43 は瓦質土器の羽釜である。体部は直線的で、口縁端部は外方へやや張り出し上端に面をもつ。44 は灰釉陶器の椀である。高台は断面三角形で、外側は直立に近い。百代寺窯式で、11 世紀の混入品である。45 は須恵器の甕である。外面は縦方向の平行状タタキ、内面には当て具痕がみられる。平安時代の混入品である。46 は常滑の甕の体部である。47 は白磁の椀である。体部に部分的に縦方向のケズリがみられる。高台は高く断面三角形である。内面と外面の高台内側下部まで施釉する。12 世紀～ 13 世紀の混入品である。

土坑 142 から出土した遺物は 14 世紀代（京都Ⅶ期中～Ⅷ期古）のものと考えられる。

土坑 143（第 16 図、図版十三・十四）

48 ～ 55 は土師器の皿である。48 ～ 50 は褐色系である。51 ～ 55 は白色系で、51・52 はへそ皿、53 はわずかに底部を押し上げている。54・55 は碗形の大型の皿である。56 は瓦質土器の鍋である。口縁部は断面がＬ字状で、端部は外側と内側に張り出し外傾する面をなす。57 は瓦質土器の羽釜である。体部は直線的で、口縁端部は内側へやや張り出し上端に面をもつ。58・59 は須恵器の片口鉢である。口縁端部が上方と下方に肥厚し、断面が三角形状を呈す。東播系で、12 世紀～ 13 世紀初頭の混入品と考えられる。

土坑 143 から出土した遺物は 14 世紀代（京都Ⅶ期中～Ⅷ期古）のものと考えられる。

土坑 201（第 17 図、図版十四）

60・61 は焼締陶器の甕類の体部片である。61 は常滑産である。

土坑 201 から出土した遺物は、図示していないが土師器片から 14 世紀半ば～ 15 世紀初頭（京都Ⅶ期新～Ⅷ期中）と考えられる。

土坑 210（第 17 図、図版十四）

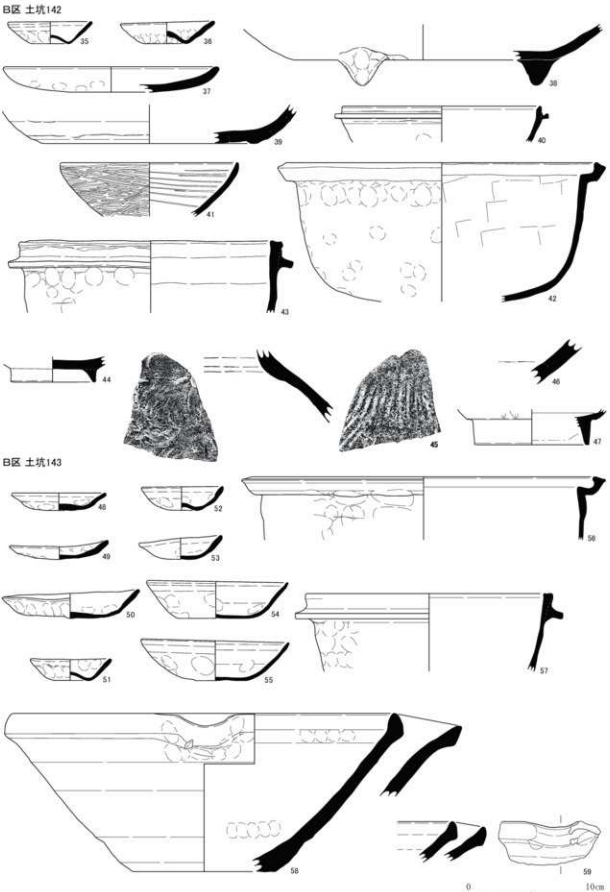
62 は須恵器の鉢である。体部はゆるやかに内湾し、口縁端部は外側にわずかに肥厚し面をなす。63 ～ 66 は白磁の椀である。63・64 は玉縁状の口縁である。65・66 の底部片はいずれも残存部の外面は露胎する。66 は高台周辺を打ち欠いて、円盤状に加工されたと考えられる。62 ～ 66 は 11 世紀末～ 12 世紀代の混入品である。67 は卸皿の底部である。古瀬戸中期頃のものである。

土坑 210 から出土した遺物は、14 世紀前半のものと考えられる。

柱穴 127（第 17 図、図版十四）

68・69 は土師器の皿である。68 は白色系の碗形の皿である。69 は「て」の字状口縁で、11 世紀前半～半ば（京都Ⅳ期古～中）の混入品と考えられる。

柱穴 127 から出土した遺物は、14 世紀～ 15 世紀初頭（京都Ⅶ期中～Ⅷ期中）のものと考えら



第16図　第2面出土遺物実測図2（縮尺1/3）

れる。

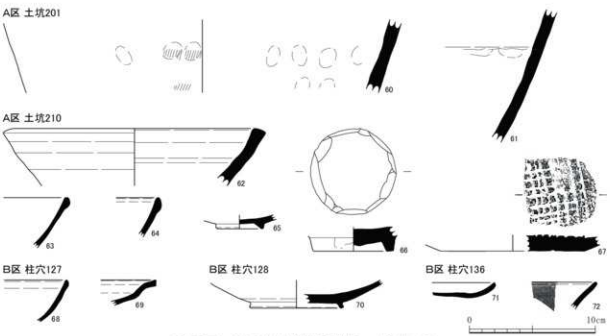
柱穴 128（第 17 図、図版十四）

70 は灰釉陶器の皿である。断面方形で外側に広がる貼付高台である。残存部では内面のみ施釉がみられる。黒笹 14 号窯式で、9 世紀前半のものである。

柱穴 136（第 17 図、図版十四）

71 は土師器の皿である。72 は緑釉陶器の椀あるいは皿である。硬質で、内面に陰刻花文が施される。9 世紀の混入品と考えられる。

柱穴 136 から出土した遺物は、12 世紀後半～ 13 世紀前半（京都Ⅵ期古～新）のものと考えられる。



第 17 図　第 2 面出土遺物実測図 3　（縮尺 1/3）

第 4 節　第 3 面の遺物

溝状遺構 135（第 18 図、図版十四）

73 は黒色土器 B 類の椀である。全面にミガキを施す。74 は緑釉陶器の椀と思われる。軟質で口縁端部は外反する。

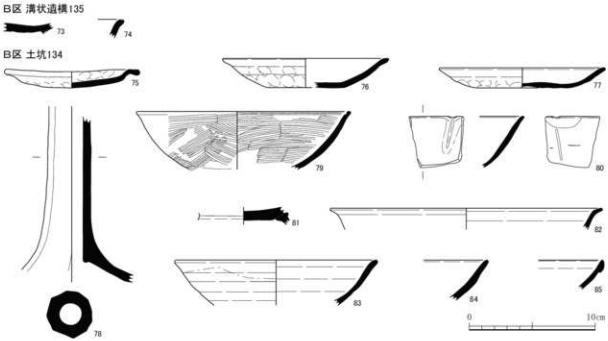
溝状遺構 135 から出土した遺物は、10 世紀のものと考えられる。

土坑 134（第 18 図、図版十四）

75 ～ 77 は土師器の皿である。75 は「て」の字状口縁である。76・77 は口縁部に二段ナデを施し、端部は外反する。78 は白色土器の高坏である。脚部は上から下へのケズリを施し、断面十角形を呈す。79 は黒色土器 B 類の椀である。内面は横方向、外面は口縁部付近に横方向、その下に斜め方向のミガキを施す。80・81 は緑釉陶器の椀である。80 は輪花椀の素地で、猿投産の黒笹 14 号窯式のものである。9 世紀前半の混入品と考えられる。81 は外方に広がる貼付高台で底部外面に回転糸切り痕が残る。10 世紀の混入品と考えられる。82 は緑釉陶器の鉢であろうか。口

縁部が屈曲気味に外反する。83 は灰釉陶器の椀である。東濃型の西坂 1 号窯式で 11 世紀のものである。84 は初期山茶碗である。85 は白磁の碗で、口縁部は玉縁状である。

土坑 134 から出土した遺物は、11 世紀代（京都Ⅳ期古～新）のものと考えられる。



第 18 図　第 3 面出土遺物実測図　（縮尺 1/3）

※出土遺物に関して、本文・表中で記述の煩雑さを避けるため下記の分類・編年を使用・参照した。

・中世土器研究会 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

・小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7 世紀～ 19世紀－』京都編集工房

・愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』愛知県

2012『愛知県史　別編　窯業３　中世・近世　常滑系』愛知県

2015『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』愛知県

第５節　瓦類

土坑 118、土坑 146 より出土した瓦である。産地の傾向としては京都系・播磨系の軒瓦が多く、種類としては軒平瓦が多く出土した。以下、遺構ごとに、瓦当文様の種別に報告する。

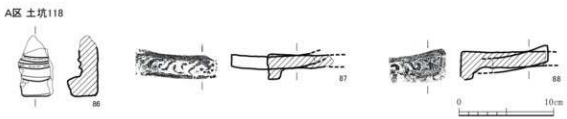
土坑 118　（第 19 図、図版十五）

１．軒丸瓦

86 は軒丸瓦である。小片であるため瓦当文様について明言はできない。胎土は橙色でやや粗い砂粒を多く含む。

２．軒平瓦

87・88 は小型の軒平瓦である。87 の瓦当部は菊花文を中心飾りとし、左右に展開する唐草文である。平瓦凹面は布目圧痕を軽く擦り消しており、凸面はナデで仕上げる。胎土は灰色で砂粒は細かい。88 の瓦当部は磨滅や欠損により中心飾りは不明である。平瓦部の調整は 87 と同様である。胎土は淡橙色で砂粒はやや粗く、焼成もやや甘い。



第 19 図　出土瓦実測図１　（縮尺 1/4）

土坑 146　（第 20 ～ 23 図、図版十五～十七）

１．軒丸瓦

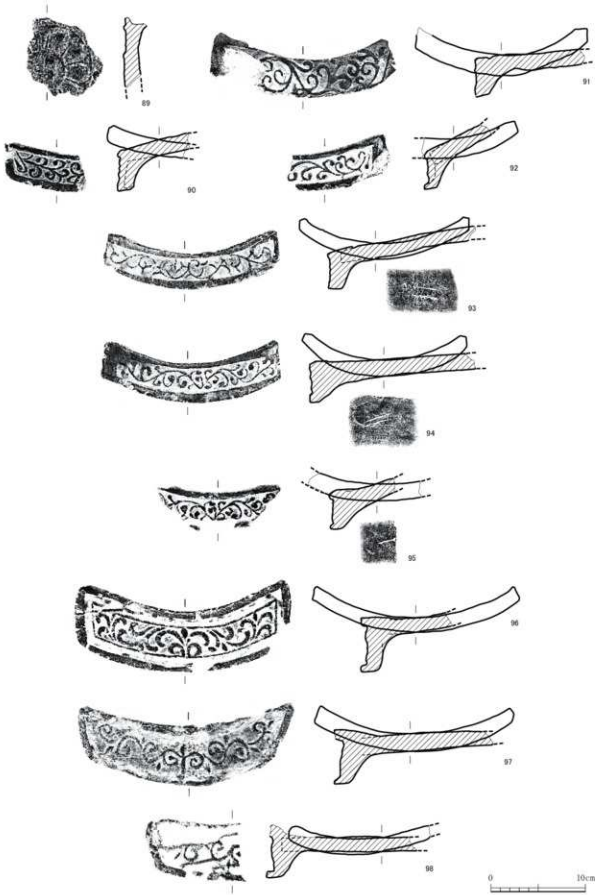
89 は単弁十葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当部は凸型の中房に０＋３の蓮子を配し、外区に珠文を巡らせる。型を押捺しただけのもので、端々に笵傷が残る。胎土は灰白色で焼成は良好である。京都系軒丸瓦で栗栖野瓦窯産とみられる。同文の瓦は過去の三条西殿の調査や尊勝寺跡でも出土している。

２．軒平瓦

２－１　偏向唐草文軒平瓦

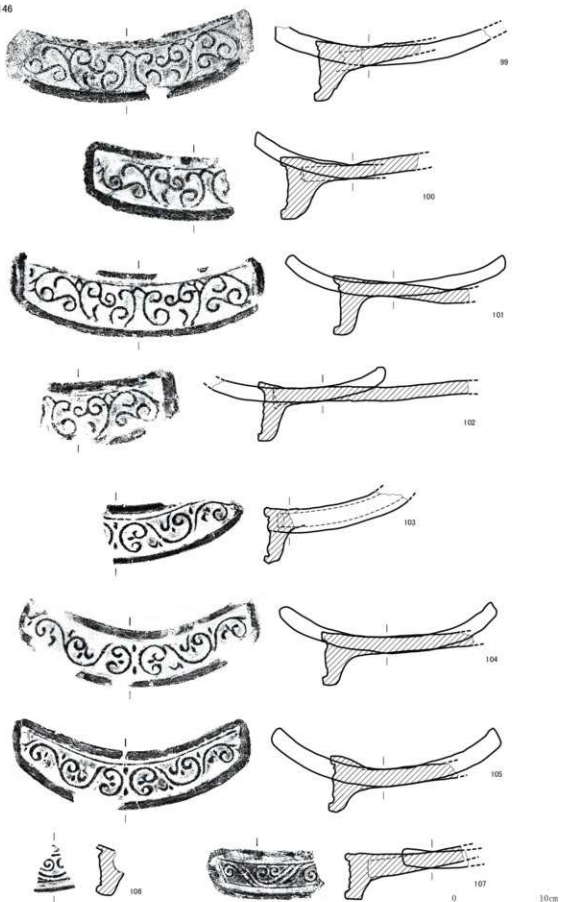
90・91 は左から右へ、92 は右から左へ偏向する唐草文軒平瓦である。90 は瓦当部に大きく笵傷が残る。胎土は灰白色で焼成は良好である。顎貼り付け技法で、平瓦凹部は布目圧痕上に糸切痕を有し、一部擦り消しを行う。瓦当面裏から平瓦凸部にかけて、粘土で一部充填しヘラでなだらかにナデつける。91 は凹部に貼り付け痕が残っていることから顎貼り付け技法と考えられる。平瓦凹部は布目圧痕上に擦り消しを施し、凸面はナデつける。92 は全体に胎土が粗い。瓦当に笵傷が大きく残り、上外区に面取りを行い、右脇区に笵ズレの痕跡が残る。平瓦部の調整は 91 と同様である。90 ～ 92 は中央官衙系と呼ばれるタイプの京都系軒平瓦で、栗栖野瓦窯や幡枝Ａ窯などで生産されていた。同文の瓦は過去の三条西殿の調査や尊勝寺跡でも出土している。

B区 土坑146



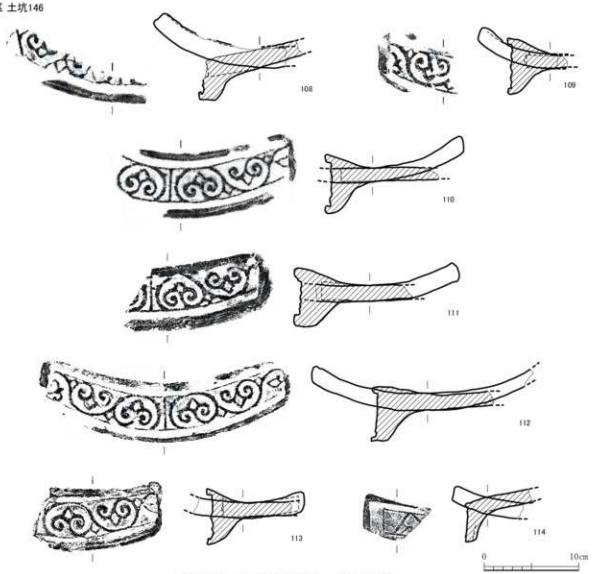
第20図　出土瓦実測図２　（縮尺 1/4）

B区 土坑146



第21図　出土瓦実測図３　(縮尺 1/4)

B区 土坑146



第22図　出土瓦実測図４　（縮尺1/4）

２－２　均整唐草文軒平瓦

93は瓦当部が右向きに巻く唐草文を中心として左右に展開する唐草文である。上外区に面取りを施し、左脇区に大きく笵ズレする。胎土は粗い。制作技法は顎貼り付けである。平瓦部凹面は布目圧痕上に糸切痕を有し、凸面は全体的にナデつける。凸面に２条のヘラ記号を刻む。94・95は同文で、顎貼り付け技法で製作される。平瓦凹面は布目圧痕が確認でき、凸面はヘラナデである。93と同じくヘラ記号を有し、94は３条、95は１条確認できる。93～95は京都系軒平瓦で、栗栖野瓦窯産とみられる。96は中心飾りがパルメット状で、主葉と子葉が界線から派生しゆるく巻き込む唐草文様である。左脇区から上外区の根元まで斜めに太い笵傷が残る。胎土は灰色で須恵質である。包み込み技法で製作され、平瓦凹面・凸面はナデて仕上げる。播磨系軒平瓦で、神出窯産とみられる。同文の瓦は過去の三条西殿の調査でも出土している。97・98は同文である。胎土は灰白色で、やや土質は粗く１～1.5㎝大の小石を含む。包み込み技法で、平瓦凹面・凸面はナデて仕上げる。播磨系軒平瓦で、三木・久留美窯のMH12類に近い。99～102は同文のＣ字背向唐草文である。中心飾りは２本の山形の線で結ばれた背向Ｃ字形で、その下端か

ら唐草が左右に転回する。１回転ごとに忍冬文を配し、子葉が分岐する。端部の巻きが強い。いずれも胎土が灰白色の須恵質で、包み込み技法で製作される。平瓦凹面･凸面ともにナデである。103～105は同文のＣ字背向唐草文である。中心飾りは背向Ｃ字形で、その上端から唐草が左右に転回する。断続的に主葉が続き、子葉との分岐に葉文を配す。103・105は一部に界線が残る。胎土は灰色で須恵質である。包み込み技法で製作されており、平瓦部は凹面・凸面ともにナデて仕上げる。99～105のＣ字背向唐草文はいずれも播磨系軒平瓦で、神出窯や久留美窯等で生産されていた。法勝寺創建瓦の系譜をひいており、創建瓦の両脇を切除し瓦当幅を狭めたもので、尊勝寺でも使用されていた瓦である。106・107は同文のＣ字下向唐草文である。垂線を挟んだ左右のＣ字下向形文様２個を中心飾りとし、界線から派生する蕨手３葉を左右に一転半させ、端部は強く巻き込む。胎土は灰白色で須恵質である。包み込み技法で製作されており、107は平瓦凹面・凸面ともにナデて仕上げている。いずれも播磨系軒平瓦で、主に久留美窯・神出窯・林崎三本松窯で生産されていた。尊勝寺創建瓦として知られており、主な出土地としては尊勝寺や三条西殿があげられる。108～113は同文のＣ字下向唐草文である。垂線を挟んだ左右のＣ字下向形文様２個を中心飾りとし、主葉を１転半させている。主葉の端部は双葉となり、忍冬文を配す。笵ズレや瓦当幅に多少の差がみられる。胎土は灰色で須恵質である。包み込み技法で製作されており、平瓦部は凹面・凸面ともにナデて仕上げる。播磨系の軒平瓦で、神出窯等で生産された。同文の瓦は三条西殿や尊勝寺、白河街区などで出土している。

２－３　幾何学文軒平瓦

114は斜格子文軒平瓦である。平瓦凹面・凸面ともにナデて仕上げる。胎土は硬質で、京都系軒平瓦である。

第５章　まとめ

今回の調査地は、平安京跡及び烏丸御池遺跡の範囲内に含まれている。烏丸御池遺跡に関連する時期の遺構や遺物は確認できなかったが、平安京跡に関わるものとして、室町時代後期から江戸時代前期・鎌倉時代から室町時代前期・平安時代後期という３時期の様相を確認することができた。以下、各時期における調査成果を述べてまとめとする。

１．第３面（平安時代後期）

第３面で確認できた遺構のうち、溝状遺構135は、その北側掘方と姉小路南築地芯の推定位置がほぼ重なっている。しかし､溝本体は掘方中央に構築されるのではなく南側掘方に寄っており、築地芯からの距離は芯々で0.３ｍである。このような位置関係から見れば、溝状遺構135は築地芯の南側に位置することになることから、溝状遺構135は姉小路南築地の内溝と考えられ、当該地にあったとされる三条西殿に直接関わる遺構ではないものの、その存在を間接的に裏付けるものである。

2．第２面（鎌倉時代から室町時代前期）

第２面では、土坑 146、148 の２基が、大規模かつ多量の遺物が出土した遺構として特筆される。先述したように、土坑 146 と 148 は遺構検出時に１基の遺構として捉えており、遺物の大半は土坑 146 として取り上げている。しかし、出土遺物の様相に大きな時期幅を持ちあわせていないことから、それほど時期を違えず遺構の構築と廃絶が行われたものと考えられる。

どちらの遺構も、廃棄土坑としての性格を推察しているが、遺構の廃絶過程と出土遺物の様相に相違点があげられる。まず、土坑 146 は単層であり、一度に埋め戻されているのに対して、土坑 148 は、複数回にわたって南側からという単一方向からの埋戻しが行われていることである。この状況は、土坑 148 から２mほど離れた北側に姉小路南築地芯の推定ラインが位置することを踏まえると、土坑 148 の廃絶時に塀が存在した可能性を示唆するものとも考えられる。次に、土坑 148 とは異なり、土坑 146 の底面付近から瓦が多く出土していることである。これらの瓦の中には、過去の三条西殿の調査のほか、法勝寺や尊勝寺、白河街区等で出土している瓦と同文のものも含まれることから、三条西殿に使用されていた可能性が高いものである。出土した瓦は、ほぼすべて平瓦類で占められ、丸瓦類の出土はごくわずかであるという出土瓦の斉一性も然ることながら、その出土量に対して接合するものが非常に少なかった。これらのことから、土坑 146 から出土した瓦は、瓦が使用されていた建物の廃絶時に廃棄されたものではなく、軒平瓦を主に選択してなんらかの目的に転用され、二次利用後に廃棄された可能性が考えられる。

これらの遺構と重複し、新しく構築されたものが溝状遺構 138 である。この遺構は柱穴列と考えられ、姉小路南築地芯の推定ラインとほぼ平行に構築されている。建物配置は確認できなかったものの、この遺構と重複あるいは隣接して柱穴 127・128・136・147・125 なども確認できることから、中世に入っても建物配置に条坊制による地割の影響が少なからず残っていたものと考えられる。

3．第１面（室町時代後期から江戸時代前期）

東西方向に走向する溝状遺構 105 は、同一遺構面のその他の遺構埋土が小礫を含む泥砂土を主体とするのに対して、シルト土を主体とし、小礫をほとんど包含せず、掘り込みに充填したとも見受けられる。そして、この遺構が西二行北一門・北二門の敷地境界線と重なっていることから、溝状遺構 105 は、区画溝である可能性が考えられる。また、溝状遺構 105 を西側への延長を想定したとき、遺構のすぐ南側に井戸 123 が位置していることから、溝状遺構 105 によって区画がなされ、その区画内に構築された建物に伴う井戸である可能性も考えられるが、後世の攪乱の影響もあり、今回の調査では、その関連性の有無を窺い知ることはできなかった。

第５表　出土遺物観察表

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量（cm）			調整・成型			色調	備考	時期
				口径	底径	器高	外面	内面				
1	A区 土坑 118	土製品	つぼ〜つば	2.2	－	2.3	ナデ、沈線１条、オサエ	ナデ、オサエ		灰白色		近世
2	A区 土坑 118	土師器	皿	7.2	－	2.1	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ		灰白色		京都Ⅵ期中〜Ⅶ期古
3	A区 土坑 118	土師器	皿	7.4	－	2.2	ナデ、オサエ	ナデ		にぶい橙色		京都Ⅵ期古〜新
4	A区 土坑 118	陶器	合子	－	(4.6)	[2.3]	ロクロナデ、施釉・底部：回転糸切痕	ロクロナデ		胎土：淡黄色・釉薬：淡黄色	幾筋（唐草か）当麻戸　中期	13 世紀〜 14 世紀
5	A区 土坑 118	白磁	碗	－	(8.4)	[1.7]	ケズリ	ロクロナデ、施釉		胎土：灰白色・釉薬：灰白色	外面に墨痕か	11 世紀末〜 12 世紀
6	A区 土坑 118	白磁	皿	－	－	[2.0]	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉、沈線１条		胎土：灰白色・釉薬：灰白色		11 世紀末〜 12 世紀
7	A区 土坑 101	土師器	皿	(10.7)	－	2.0	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ		にぶい黄橙色		京都Ⅹ期新〜Ⅺ期古
8	A区 土坑 111	瓦質土器	羽釜	(20.3)	－	[4.5]	ナデ	ナデ、ユビオサエ		黄灰色、灰白色	外面ススけ着	14 世紀〜 15 世紀代
9	A区 土坑 111	青磁	碗	－	(5.7)	[1.9]	ロクロナデ、施釉、ケズリ	施釉、重ね焼き痕か		胎土：灰白色・釉薬：オリーブ灰色	蓮瓣弁文、南方青磁	14 世紀〜 15 世紀代
10	A区 土坑 111	石製品	硯	長さ (8.6)	幅 (9.0)	厚さ (1.6)	－	－		灰白色		－
11	A区 土坑 111	石製品	砥石	長さ (12.5)	幅 (2.2)	厚さ (2.3)	表面・右側面を砥面として使用、タテ方向・斜め方向の擦痕が残る。裏面・左側面は成形時の擦痕が残る	－		浅黄色		－
12	A区 土坑 113	土師器	皿	5.4	－	1.2	オサエ	ナデ		にぶい黄橙色		京都Ⅹ期中〜Ⅺ期古
13	A区 溝状遺構 117	土師器	皿	(12.8)	－	[2.7]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ		灰白色		京都Ⅶ期古〜新
14	A区 溝状遺構 117	瓦質土器	擂鉢	(35.8)	－	[4.7]	ロクロナデ	ロクロナデ、5本１組の擂り目		橙色	外面ススけ着か、信楽	16 世紀前半
15	B区 柱穴 144	土師器	皿	(10.1)	－	[1.6]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ		にぶい橙色		京都Ⅶ期新〜Ⅷ期古
16	B区 柱穴 144	土師器	皿	－	－	[2.8]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ		灰白色		京都Ⅶ期新〜Ⅷ期古
17	B区 柱穴 144	白磁	碗	－	－	[1.8]	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉		胎土：灰白色・釉薬：灰白色		京都Ⅶ期新〜Ⅷ期古
18	B区 土坑 146	土師器	皿	9.5	－	1.9	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、一部ユビオサエ		浅黄橙色		京都Ⅳ期古〜Ⅴ期新
19	B区 土坑 146	土師器	皿	(10.6)	－	[1.2]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ		浅黄橙色		京都Ⅳ期古〜Ⅴ期新
20	B区 土坑 146	土師器	皿	(12.4)	－	[2.5]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ		浅黄橙色		京都Ⅳ期古〜Ⅴ期新
21	B区 土坑 146	土師器	皿	(16.4)	－	2.6	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		にぶい黄橙色		京都Ⅳ期古〜Ⅴ期新
22	B区 土坑 146	土師器	皿	－	－	[2.0]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ		にぶい黄橙色		京都Ⅳ期古〜Ⅴ期新
23	B区 土坑 146	土師器	皿	－	－	[2.6]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ		浅黄橙色		京都Ⅳ期古〜Ⅴ期新
24	B区 土坑 146	土師器	鉢	－	－	[6.0]	ヨコナデ、オサエ	ナデ		にぶい黄橙色		京都Ⅳ期古〜Ⅴ期新
25	B区 土坑 146	須恵器	鉢	－	－	[3.0]	ロクロナデ	ロクロナデ		青灰色		11 世紀
26	B区 土坑 146	須恵器	鉢	－	(9.6)	[5.5]	ロクロナデ、ナデ・底部：回転糸切痕	ロクロナデ		灰白色	一部ススけ着	11 世紀
27	B区 土坑 146	陶器	甕	－	－	[4.2]	ロクロナデ、降灰	ロクロナデ		灰白色	鎬投か	12 世紀頃
28	B区 土坑 146	輸入陶器	盤	－	－	[2.9]	ナデ、施釉	沈線１条、施釉		胎土：浅黄橙色・釉薬：濃緑色	福建省磁灘窯	京都Ⅳ期古〜Ⅴ期新
29	B区 土坑 146	白磁	輪花皿	(12.0)	－	[2.6]	ロクロナデ、ケズリ、施釉	ロクロナデ、施釉		胎土：灰白色・釉薬：灰白色	口縁端部に切り込みが入れられ、その下の外面に沈線が入れられる	京都Ⅳ期古〜Ⅴ期新
30	B区 土坑 146	白磁	蓋	－	－	[0.5]	施釉	ロクロナデ、施釉		胎土：灰白色・釉薬：灰白色	上面に花文	京都Ⅳ期古〜Ⅴ期新
31	B区 土坑 146	青磁	碗	－	－	[4.0]	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉		胎土：灰白色・釉薬：明緑灰色	蓮弁文	京都Ⅳ期古〜Ⅴ期新
32	B区 土坑 139	土師器	皿	(11.9)	－	3.0	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		淡黄橙色		京都Ⅶ期新〜Ⅷ期中
33	B区 土坑 139	瓦質土器	火鉢	(41.4)	－	[6.0]	ミガキ	ヨコナデ、ナデ		灰色、灰白色	突帯２条の間に花菱文	14 世紀後〜 15 世紀
34	B区 土坑 139	瓦質土器	火鉢	－	(35.9)	[4.5]	ケズリ、ナデ	ナデ		灰黄色、にぶい黄橙色		14 世紀〜 15 世紀
35	B区 土坑 142	土師器	皿	6.6	－	1.8	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ		灰白色		京都Ⅶ期中〜Ⅷ期古
36	B区 土坑 142	土師器	皿	7.3	－	1.8	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ		灰白色		京都Ⅶ期中〜Ⅷ期古

※法量の口径・底径の（ ）は復元値、器高の［ ］は残存値を表す。

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量（cm）			調整・成型		色調	備考	時期
				口径	底径	器高	外面	内面			
37	B区 土坑142	土師器	皿	(16.9)	－	2.0	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	にぶい橙色		京都V期前～VI期中
38	B区 土坑142	土師器	鉢	－	(20.4)	[4.8]	ナデ、コビキサエ、脚貼付	ヘラナデか	浅黄橙色	外面に輪積み痕が残る	京都VI期中～VII期古
39	B区 土坑142	土師器	鉢	－	(15.9)	[3.1]	ナデ	ナデ	浅黄橙色	外面に輪積み痕が残る	京都VI期中～VII期古
40	B区 土坑142	土師器	ミニチュア羽釜	(15.6)	－	[2.9]	ヨコナデ、ナデ、オサエ	ヨコナデ	浅黄橙色		京都VI期中～VII期古
41	B区 土坑142	瓦器	椀	(14.1)	－	[4.8]	ミガキ	ミガキ、ナデ	オリーブ黒色、灰白色		12 世紀中
42	B区 土坑142	瓦質土器	鍋	(24.4)	－	[11.0]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ヨコハケ	黒褐色、灰黄色	外面スス付着	京都VI期中～VII期古
43	B区 土坑142	瓦質土器	羽釜	(19.0)	－	[5.7]	ヨコナデ、オサエ	ナデ	黄灰色、灰白色		京都VI期中～VII期古
44	B区 土坑142	灰釉陶器	椀	－	6.5	[2.0]	ロクロナデ、ユビナデ	ロクロナデ、施釉	胎土：にぶい黄橙色・釉薬：オリーブ黄色	百代寺窯式	11 世紀
45	B区 土坑142	須恵器	甕	－	－	[5.7]	平行状タタキ、縦灰	ナデ、当て具痕	灰白色、灰色		平安時代
46	B区 土坑142	焼締陶器	甕	－	－	[3.5]	ナデ、オサエ	ナデ	黒褐色	常滑産	－
47	B区 土坑142	白磁	碗	－	(8.9)	[2.8]	施釉、2ヵ所削いでいる	施釉	胎土：灰白色・釉薬：灰白色		12 世紀～13 世紀
48	B区 土坑143	土師器	皿	(7.3)	－	1.4	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	橙色		京都VI期中～VII期古
49	B区 土坑143	土師器	皿	7.4	－	1.5	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	橙色		京都VI期中～VII期古
50	B区 土坑143	土師器	皿	10.7	－	2.3	ヨコナデ、オサエ、底部：板状圧痕	ヨコナデ、ナデ	にぶい黄橙色		京都VI期中～VII期古
51	B区 土坑143	土師器	皿	(6.2)	－	1.7	ヨコナデ、オサエ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	灰白色		京都VI期中～VII期古
52	B区 土坑143	土師器	皿	6.4	－	1.9	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	灰白色		京都VI期中～VII期古
53	B区 土坑143	土師器	皿	6.4	－	1.9	ナデ	ヨコナデ、ナデ	灰白色		京都VI期中～VII期古
54	B区 土坑143	土師器	皿	11.1	－	2.9	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	灰白色	外面スス付着	京都VI期中～VII期古
55	B区 土坑143	土師器	皿	11.6	－	3.2	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	灰白色		京都VI期中～VII期古
56	B区 土坑143	瓦質土器	鍋	(27.0)	－	[5.0]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	暗灰色、灰白色		京都VI期中～VII期古
57	B区 土坑143	瓦質土器	羽釜	(19.4)	－	[6.2]	ナデ、オサエ	ナデ	黒褐色、黄灰色		京都VI期中～VII期古
58	B区 土坑142・土坑143	須恵器	片口鉢	(30.2)	(11.4)	12.5	ナデ、一部オサエ	ナデ、一部オサエ	黄灰色	東播系	12 世紀～13 世紀初
59	B区 土坑143	須恵器	片口鉢	－	－	[3.3]	ロクロナデ、オサエ	ロクロナデ、オサエ	黄灰色	東播系	12 世紀～13 世紀初
60	A区 土坑201	焼締陶器	甕	－	－	[5.8]	ナデ	ナデ	灰褐色		－
61	A区 土坑201	焼締陶器	甕	－	－	[10.5]	ナデ	ナデ	黒褐色	常滑産	－
62	A区 土坑210南側	須恵器	鉢	(19.0)	－	[4.6]	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色		11 世紀
63	A区 土坑210南側	白磁	碗	－	－	[4.0]	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	胎土：灰白色・釉薬：灰白色	玉縁状口縁	12 世紀
64	A区 土坑210北側	白磁	碗	－	－	[3.1]	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	胎土：灰白色・釉薬：灰白色	玉縁状口縁	12 世紀
65	A区 土坑210南側	白磁	碗	－	3.5	[1.1]	ケズリ	ロクロナデ、施釉	胎土：灰白色・釉薬：灰白色		12 世紀
66	A区 土坑210北側	白磁	碗	－	6.3	[1.9]	ケズリ、施釉	施釉	胎土：灰白色・釉薬：灰白色	円盤状に加工	12 世紀
67	A区 土坑210北側	陶器	卸皿	－	(11.4)	[1.3]	ロクロナデ、釉ハガレ・底部：回転糸切痕、ナデ、施釉	ロクロナデ、施釉、卸目	胎土：灰白色・釉薬：茂黄色	古瀬戸　中期	14 世紀前半
68	B区 柱穴127	土師器	皿	－	－	[3.2]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	灰白色		京都VI期中～VII期中
69	B区 柱穴127	土師器	皿	－	－	[2.0]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	にぶい橙色	外面スス付着	京都IV期古～中
70	B区 柱穴128	灰釉陶器	皿	－	(7.2)	[2.2]	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、施釉	胎土：灰黄色・釉薬：灰白色	猿投系	K-14 窯式（9 世紀前葉）
71	B区 柱穴136	土師器	皿	－	－	1.2	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	茂黄橙色		京都VI期古～新
72	B区 柱穴136	緑釉陶器	椀か皿	－	－	[2.2]	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	胎土：黄灰色・釉薬：茂緑色	内面に線刻花文	9 世紀
73	B区 溝状遺構135 掘方埋土	黒色土器	椀	－	－	[0.9]	ナデ	ミガキ	黄灰色	B類	10 世紀
74	B区 溝状遺構135 掘方埋土	緑釉陶器	椀	－	－	[1.5]	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	胎土：灰白色・釉薬：茂緑色		10 世紀

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量（cm）			調整・成型		色調	備考	時期
				口径	底径	器高	外面	内面			
75	B区 土坑134	土師器	皿	10.5	－	1.5	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	にぶい橙色		京都Ⅳ期古～新
76	B区 土坑134	土師器	皿	(13.0)	－	2.3	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ	灰白色		京都Ⅳ期古～新
77	B区 土坑134	土師器	皿	(13.0)	－	[1.6]	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	にぶい橙色		京都Ⅳ期古～新
78	B区 土坑134	白色土器	高坏 （脚部）	－	－	[13.9]	ケズリ（断面十角形）	ナデ	灰白色		京都Ⅳ期古～新
79	B区 土坑134	黒色土器	椀	(16.8)	－	[4.6]	ミガキ	ミガキ、沈線1条	オリーブ黒色	B類	京都Ⅳ期古～新
80	B区 土坑134	緑釉陶器	輪花椀	－	－	[4.1]	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ナデ	灰白色	口縁端部に切り込みが入れられ、その下の体部内面に線刻と外面に沈線が入れられる 猿投	K-14号窯式（9世紀前葉）
81	B区 土坑134	緑釉陶器	椀	－	－	[1.4]	ナデ、施釉・底部：回転糸切痕	ロクロナデ、施釉	胎土：淡黄橙色・釉薬：濃緑色	貼付高台	10世紀
82	B区 土坑134	緑釉陶器	鉢か	(21.4)	－	[1.7]	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	胎土:灰白色・釉薬：オリーブ黄色		－
83	B区 土坑134	灰釉陶器	椀	(16.0)	－	[3.6]	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	胎土:灰白色・釉薬：灰白色	漬け掛けか 全体的に使用痕 東濃系 西坂1号窯式	11世紀
84	B区 土坑134	山茶碗	碗	－	－	[3.2]	ロクロナデ、全面に降灰	ロクロナデ、降灰	胎土:灰白色・降灰：灰白色	初期山茶碗 3型式	11世紀末～12世紀初
85	B区 土坑134	白磁	碗	－	－	[2.3]	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	胎土:灰白色・釉薬：灰白色	玉縁状口縁	11世紀末

※法量の口径・底径の（ ）は復元値、器高の［ ］は残存値を表す。

第６表　出土瓦類観察表

遺物番号	遺構	種類	瓦当文様	法量（cm・［ ］は残存値）						成形・調整		産地
				瓦当面				平・丸瓦部		平・丸瓦部		
				唇れの長さ	幅（最大）	厚さ	蓮子数	長さ	厚さ	凸面	凹面	
86	A区 土坑 118	軒丸瓦	不明（巴か）	[6.4]	[3.7]	3.2	－	－	－	－	－	不明
87	A区 土坑 118	軒平瓦	唐草文	2.6	[9.0]	1.1	－	[6.5]	1.4	ヨコナデ、ヨコナデ後ヨコ方向のヘラナデ、タテナデ	布目痕、ヘラナデ	大和産か
88	A区 土坑 118	軒平瓦	唐草文	3.0	[7.0]	1.3	－	[9.6]	1.6	ヨコナデ、ヨコナデ後ヨコ方向のヘラナデ、タテナデ	布目痕、ナデ	大和産か
89	B区 土坑 146	軒丸瓦	単弁十葉蓮華文	[7.2]	[9.4]	[2.4]	6+3	－	－	－	－	山城産
90	B区 土坑 146	軒平瓦	唐草文	4.3	[8.6]	1.7	－	[7.6]	1.7	ユビオサエ後タテ方向のヘラナデ	布目痕、斜め方向のヘラナデ	山城産
91	B区 土坑 146	軒平瓦	唐草文	4.1	19.6	1.5	－	[11.6]	1.6	ユビオサエ、ヘラナデ	布目痕、ユビオサエ、ナデ	山城産
92	B区 土坑 146	軒平瓦	唐草文	4.0	[10.2]	1.3	－	[7.1]	1.5	ユビナデ、タテ方向のヘラナデ	布目痕、ナデ	山城産
93	B区 土坑 146	軒平瓦	唐草文	3.9	18.7	1.5	－	[15.7]	1.5	ナデ、ユビオサエ、縄刻２条	ナデ、ヨコナデ、布目痕	山城産
94	B区 土坑 146	軒平瓦	唐草文	4.3	18.9	1.0	－	[17.5]	1.7	ヨコ方向のナデ、ユビオサエ後タテ方向のナデ、縄刻３条	布目痕、ナデ、コビキ痕	山城産
95	B区 土坑 146	軒平瓦	唐草文	4.2	[14.7]	1.4	－	[7.4]	1.5	ヨコナデ、ユビオサエ、縄刻１条	布目痕、ヨコ方向のナデ、斜め方向のナデ	山城産
96	B区 土坑 146	軒平瓦	唐草文	5.7	22.7	2.0	－	[9.6]	1.5	ヨコ方向のヘラナデ、タテ方向のヘラナデ	ヨコ方向のヘラナデ、タテ方向のユビナデ	播磨産
97	B区 土坑 146	軒平瓦	唐草文	5.7	23.0	1.5	－	[16.7]	1.6	ヨコ方向のヘラナデ、タテ方向のヘラナデ	ヨコ方向のヘラナデ、タテ方向のヘラナデ	播磨産
98	B区 土坑 146	軒平瓦	唐草文	[5.5]	[14.9]	1.6	－	[15.9]	1.5	ヨコ方向のナデ、タテ方向のナデ、ユビオサエ	ヨコ方向のナデ、タテ方向のナデ	播磨産
99	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字脊向唐草文	[6.3]	[26.2]	1.3	－	[11.1]	1.7	ヨコナデ（ヘラか）・ヨコナデ、タテナデ	ナデ、ユビオサエ	播磨産
100	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字脊向唐草文	6.5	[16.0]	1.6	－	[14.8]	1.6	ヨコ方向のナデ、ユビオサエ、タテ方向のヘラナデ	ヨコ方向のナデ、ユビオサエ後タテ・ヨコ方向のヘラナデ	播磨産
101	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字脊向唐草文	6.2	26.8	2.1	－	[14.3]	1.4	ヨコ方向のヘラナデ、タテ方向のヘラナデ	ヨコ方向のヘラナデ、タテ方向のヘラナデ	播磨産
102	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字脊向唐草文	6.2	[21.0]	1.1	－	[23.0]	1.4	ヨコ方向のヘラナデ、タテ方向のヘラナデ	ヨコ方向のヘラナデ、タテ方向のヘラナデ	播磨産
103	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字脊向唐草文	5.9	[14.8]	1.5	－	[3.3]	2.5	ヨコ方向のナデ	ヨコ方向のナデ	播磨産
104	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字脊向唐草文	5.6	25.2	1.5	－	[16.1]	1.5	ヨコ方向のナデ、タテ方向のヘラナデ、一部ユビオサエ	不定方向のナデ、タテ方向のヘラナデ	播磨産
105	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字脊向唐草文	5.9	25.1	1.8	－	[13.6]	1.7	ヨコ方向のナデ、ヘラナデ	ヨコ方向のナデ、タテ方向のヘラナデ	播磨産
106	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字下向唐草文	[5.3]	[4.6]	1.8	－	[2.9]	－	－	－	播磨産
107	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字下向唐草文	4.8	[12.6]	1.7	－	[12.6]	1.6	ヨコ方向のナデ、タテ方向のナデ	ヨコ方向のナデ、不定方向のナデ	播磨産
108	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字下向唐草文	[4.5]	[15.9]	1.7	－	[10.8]	1.8	ヨコ方向のヘラナデ、タテ方向のヘラナデ	タテ方向のユビナデ、ヘラナデ	播磨産
109	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字下向唐草文	[5.9]	[11.0]	[1.4]	－	[6.3]	1.6	ヨコ方向のナデ	ヨコ方向のヘラナデ、タテ方向のナデ	播磨産
110	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字下向唐草文	6.2	[19.0]	1.4	－	[12.1]	1.4	ヨコ方向のヘラナデ、タテ方向のヘラナデ	ユビオサエ、ヨコ方向のナデ、タテ方向のヘラナデ	播磨産
111	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字下向唐草文	6.2	[16.7]	2.3	－	[12.6]	1.6	ヨコ方向のナデ、タテ方向のヘラナデ	ユビオサエ、不定方向のナデ	播磨産
112	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字下向唐草文	5.7	26.5	1.7	－	[12.9]	1.4	ヨコ方向のナデ、タテ方向のヘラナデ	ヨコ方向のナデ、タテ方向のヘラナデ	播磨産
113	B区 土坑 146	軒平瓦	Ｃ字下向唐草文	5.9	[13.7]	2.1	－	[9.1]	1.4	ヨコ方向のナデ、ユビオサエ	ヨコ方向のナデ、タテ方向のナデ、ユビオサエ	播磨産
114	B区 土坑 146	軒平瓦	斜格子文	4.1	[7.6]	1.1	－	[7.6]	1.4	ユビオサエ、ヘラナデ、磨耗	布目痕、斜め方向のヘラナデ	山城産

写　真　図　版

1．調査前状況（北から）

2．井戸123掘削状況（西から）

3．井戸123断割状況（西から）

4．溝状遺構105検出状況（東から）

5．溝状遺構105土層断面状況（西から）

図版一

1．溝状遺構105完掘状況（東から）

2．土坑118完掘状況（北から）

3．柱穴121土層断面状況（南から）

4．柱穴121完掘状況（北から）

5．第１面完掘状況（南から）

1．第１面完掘状況（西から）

2．柱穴144、柱穴145検出状況（西から）

図版四

1．柱穴144土層断面状況（南から）

2．柱穴144完掘状況（北から）

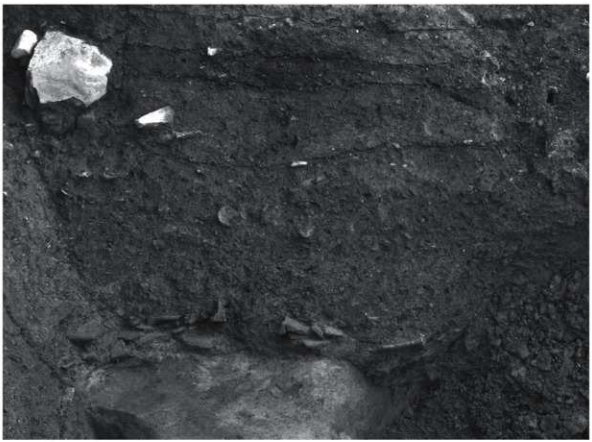
3．柱穴145土層断面状況（南から）

4．柱穴145完掘状況（北から）

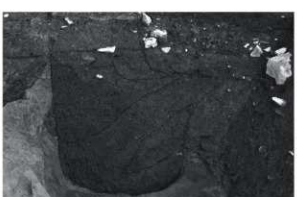
5．溝状遺構138・柱穴144・柱穴145完掘状況（西から）

1．土坑146完掘状況（南から）

2．土坑148完掘状況（南から）



1．土坑146土層断面状況（北から）



2．土坑146、土坑148土層断面状況（西から）

3．土坑210土層断面状況（北西から）

4．柱穴125掘削状況（南西から）

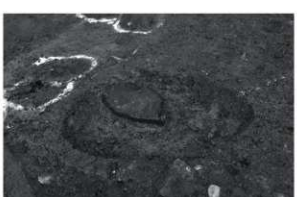
5．柱穴125完掘状況（南から）

1．柱穴127完掘状況（西から）

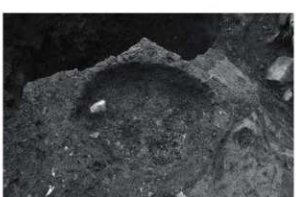
2．柱穴128遺構検出状況（西から）

3．柱穴128土層断面状況（東から）

4．柱穴128完掘状況（東から）



5．柱穴136掘削状況（南西から）



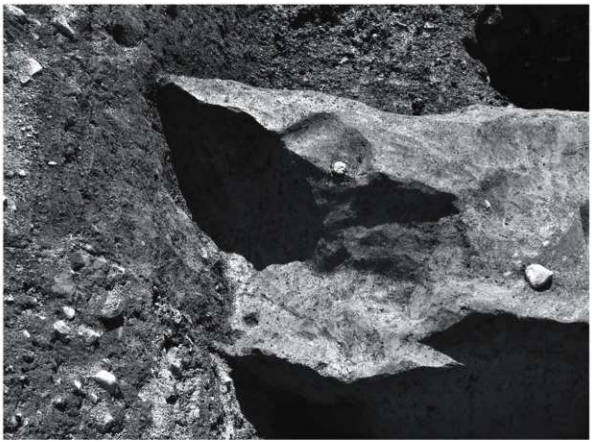
6．柱穴136完掘状況（北東から）

7．柱穴147土層断面状況（南から）

8．柱穴147完掘状況（北から）

1．土坑134土層断面状況（北から）

2．土坑134遺物出土状況（北から）



1．土坑134完掘状況（北から）

2．溝135遺構検出状況（西から）

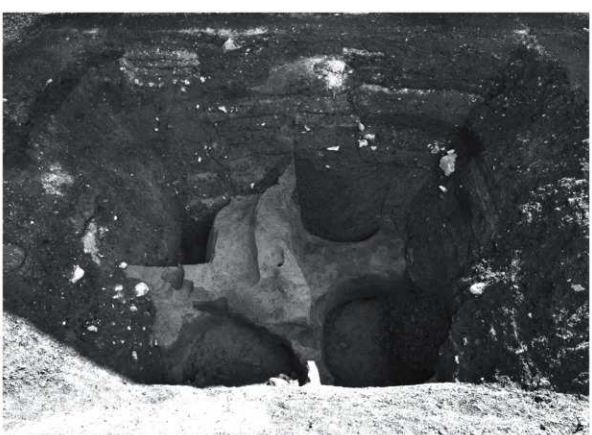
3．溝135土層断面状況（西から）

4．溝135掘削状況（西から）

5．溝135掘方埋土土層断面状況（西から）

図版十

1．溝135完掘状況（西から）



2．第２面、第３面完掘状況（西から）

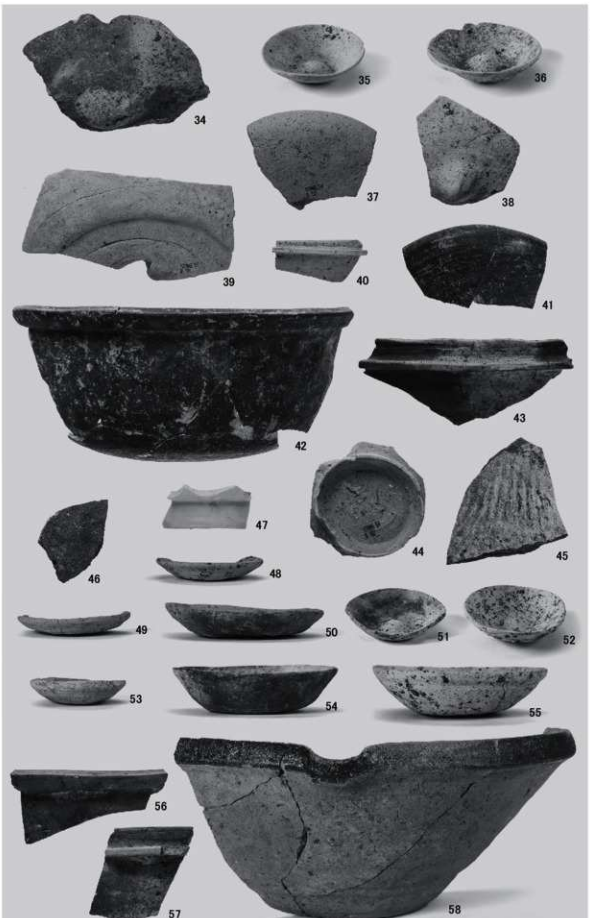
図版十一

1．A区南壁土層断面状況（北から）

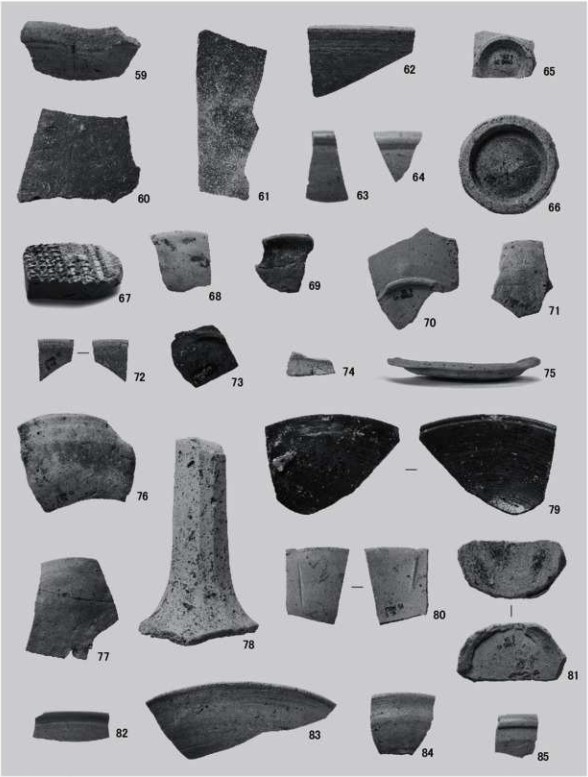
2．B区東壁土層断面状況（西から）

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

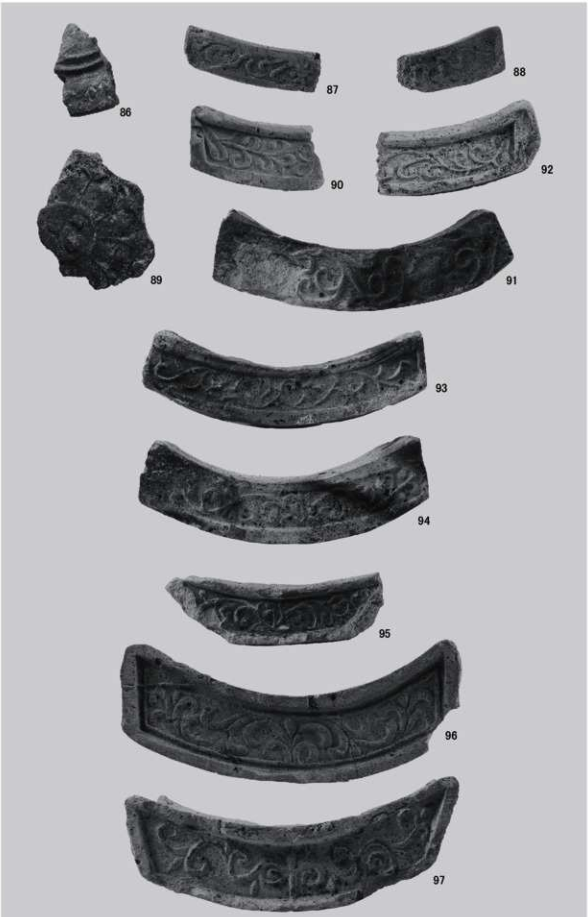
1．出土遺物１


34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58

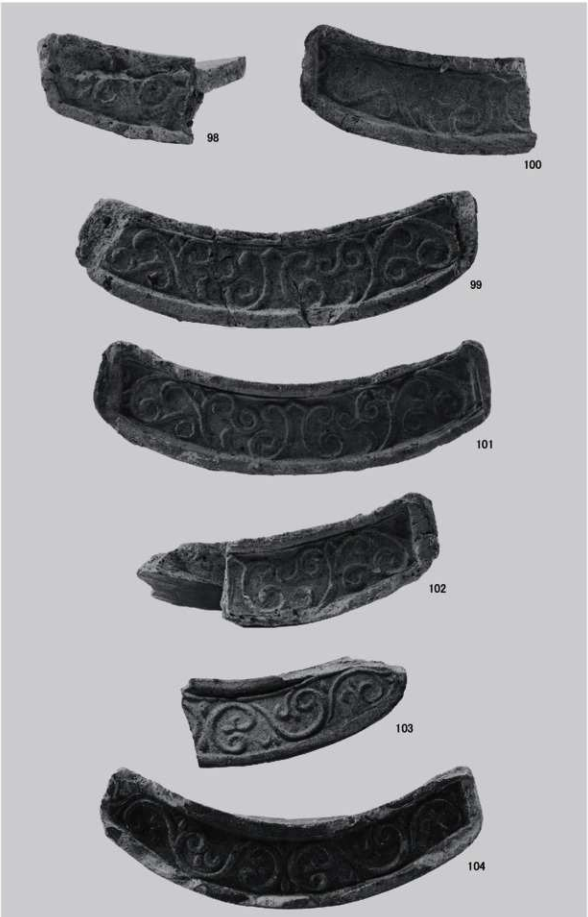
1．出土遺物２


59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85

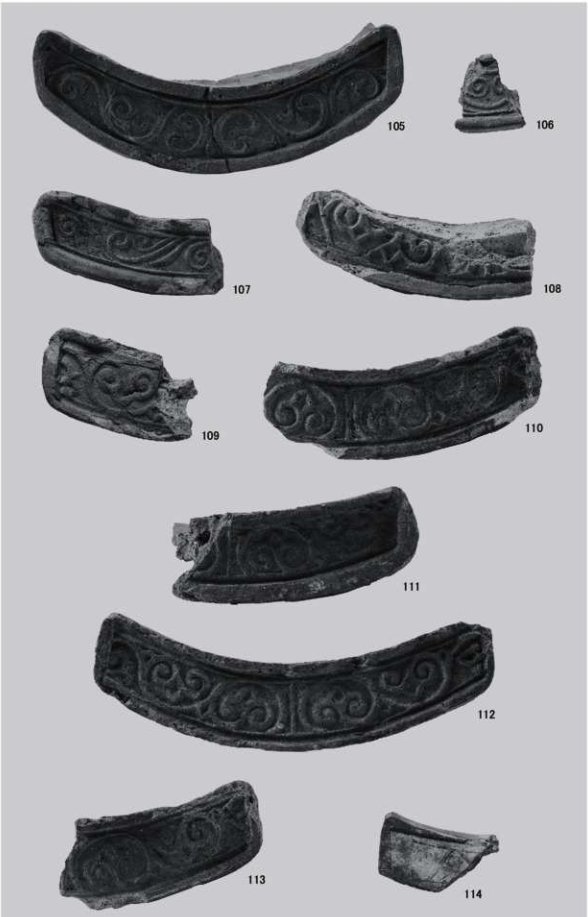
1．出土遺物３



1．出土瓦類 1



1．出土瓦類2



1．出土瓦頭3

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいあんきょうさきょうさんじょうさんぼうじゅうにちょうあと・からすまおいけいせき
書　　名	平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡
副 書 名	柿本町における埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	イビソク京都市内遺跡調査報告
シリーズ番号	第19輯
編 著 者 名	田邉　一元、小池　智美、石井　明日香
編 集 機 関	株式会社イビソク関西支店
所　在　地	〒612-8425　京都府京都市伏見区竹田田中殿町86番地　TEL 075-632-8109
発 行 年 月 日	2018年5月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡	京都市中京区両替町姉小路下る柿本町406、408番	26104	1・464	35°00′35″	135°45′31″	20170906～20171006	121.5㎡	宿泊施設建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡	都城跡 集落跡	平安時代後期	土坑、溝状遺構	土師器・須恵器・瓦器・白色土器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・山茶碗・陶器・輸入陶器・青磁・白磁・瓦	
		鎌倉時代～室町時代前期	柱穴、土坑、溝状遺構	土師器・瓦質土器・陶器・焼締陶器・青磁・白磁・瓦	
		室町時代後期～江戸時代前期	柱穴、土坑、溝状遺構、井戸	土師器・土製品・焼締陶器・瓦・石製品	
要　約	平安時代～近世にかけての平安京に関する3面の調査を行った。 平安時代後期に属する姉小路南築地の内溝と考えられる遺構を確認したほか、鎌倉時代から室町時代前期に属する廃棄土坑から、三条西殿に使用されていたと思われる瓦が多く出土していることは、三条西殿の存在を裏付ける間接的資料となる。また、鎌倉時代以降の調査面においても、条坊制の影響を残していると思われる柱穴列や区画溝なども確認しており、本調査地における土地利用の変遷を垣間見ることが出来る。				

平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡
—柿本町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日　2018年5月31日

編　集
発　行　株式会社イビソク関西支店

住　所　京都府京都市伏見区竹田田中殿町８６番地
〒612-8425　TEL 075-632-8109

印　刷　富士出版印刷株式会社